

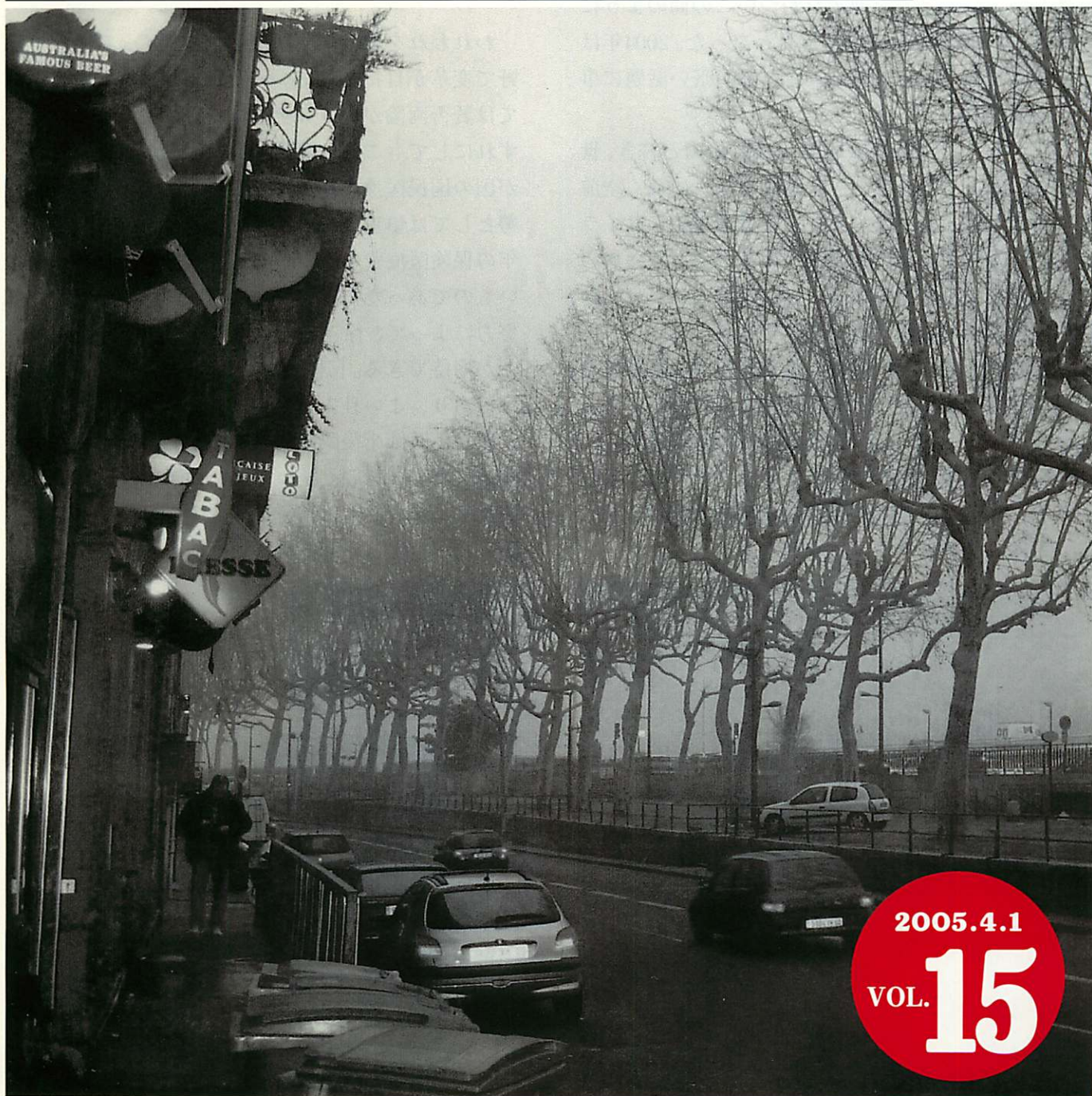


INFOS

日仏整形外科学会広報誌

アンフォ

■会長.....小野村敏信
Président T. ONOMURA
■副会長.....小林 晶
Vice-Président A. KOBAYASHI
■書記長.....瀬本喜啓 ■書記・会計.....大橋弘嗣 弓削 至 青木 清 藤原憲太
Secrétaire général Y. SEMOTO Secrétaire et Trésorier H. OHASHI I. YUGE K. AOKI K. FUJIWARA
■事務局: 〒569-8686 大阪府高槻市大学町2-7 大阪医科大学整形外科学教室内
Tel. (072)683-1221 代表 (内)2364 Fax. (072)682-8003
Bureau: Dept. of Orthopaedic Surgery, Osaka Med. College, Takatsuki, Osaka 569-8686 JAPON
■発行所: 〒530-0012 大阪市北区芝田2-10-39 大阪府済生会中津病院 (編集者: 大橋弘嗣)
Tel. (06)6372-0333 Fax. (06)6372-0339
Maison d'édition: Saiseikai Nakatsu Hospital, Shibata, Kita-ku, Osaka 530-0012 JAPON (Éditeur: H. OHASHI)
■ホームページアドレス: <http://www.sofjo.gr.jp>



2005 年への期待

21世紀は早くも5年目

新しいミレニアムを迎えたがついこの間のように思うのに、21世紀は早くも5年目となった。2004年は日本でも世界でも、天災、人災などの暗い話題に事欠かなかった。

天災としてわが国では地震、台風、豪雨と続き、世界的にはインドネシアの巨大地震とそれに続く空前の大津波が追打ちとなった。人災は国際的にはイラク問題が尾を引き、テロの恐れのないところはないといってもよい状態である。身近なところでは、動機理解に苦しむような殺人事件が続いている。炭酸ガス濃度上昇などの環境汚染と関係する異常気象や温暖化の問題は、人間が引き起こす天災ということだろうが、このような地球規模の問題への対応が、それぞれの国の思惑があってまとまらないのが気がかりである。2005年には、解決とはゆかないまでも、よい方向付けができることを望みたい。

整形外科が如何に魅力ある科であることを示してゆく努力が求められる

われわれを取り巻く医療の世界でも、数多くの分野で変革が目指されている。混合診療の問題については賛否両論がマスメディアを賑わせているが、いずれにしてもこれは戦後半世紀以上も続けてきたわが国の国民医療の基本理念に触れるものであり、姿勢としては慎重であってよいと私は考えている。近年の保険医療費の改定が整形外科診療にとって厳しいものであったことについては、多くのかたがたの努力によって、徐々にではあるがよい方向に向かうことが期待できる。「運動器の10年」の世界運動も道半ばであり、よい仕上げを迎えたいものである。

新しい医師卒後臨床研修制度がいよいよ昨年から発足した。ながらく続いてきた大学医局中心の研修制度は、きわだった長所と短所をあわせ持つものであったが、新しい卒後研修制度によってどのような



●総会で挨拶される小野村会長



●Bollini 先生と小野村会長

小 野 村 敏 信

結果がでるのか、期待と不安が交錯する。不安の一つは新しい制度でローテイトの必須科目が外れた整形外科に、研修終了後どの程度の希望医師が集まるかということである。整形外科が如何に魅力ある科であるかを示してゆく努力が、すべての立場の整形外科医に求められるということであろう。

実りの多い集会だった第11回のSOFJO

日仏整形外科学会（SOFJO）は発足以来数えてみれば18年目ということになる。昨年秋にはマルセイユからBOLLINI先生をゲストスピーカーにお招きして、第11回のSOFJOを神戸で開催し、実りの多い集会を持つことができた。会場の一部を快くご提供頂いた中部日本整形外科災害外科学会会長の浜西千秋教授、ご参加の皆様にご心からお礼を申し上げる次第である。

日仏の整形外科にとって2004年の痛恨事は、なん

といっても11月21日にCHARLES PICAULT先生が亡くなられたことであり、このINFOSが追悼号ということになった。先生のご遺徳を偲ぶのは別項に譲り、ここでは心からご冥福をお祈りしたい。

第8回日仏整形外科合同会議（AFJO）を成功させよう

本年の5月6～8日には瀬本喜啓先生を会長として、第8回日仏整形外科合同会議（AFJO）が京都で開かれる予定であり、すでにフランス側からも多数の演題申込みが来ているとのことである。この会を継続するための整形外科を取り巻く環境は、日仏ともに厳しさを増しつつあるのが現状である。AFJO発足のフランス側の中心であったPICAULT先生のご遺志に報いるためにも、この会が盛会であってほしいと思い、皆様方のご参加、ご協力を心から願う次第である。



●学会風景

第11回日仏整形外科学会

11ème Réunion de la SoFJO

■ 日 時

2004年11月6日(土) 午後4時15分から

■ 場 所

神戸国際会議場 401 + 402 号室

INTERNATIONAL CONFERENCE CENTER KOBE

〒650-0046 神戸市中央区港島中町6-9-1 TEL: 078-302-5200

6-9-1 Minatojima-nakamachi, Chuo-ku, Kobe 650-0046, Japan

(第103回中部整形災害外科学会の会場と隣接)

※「ホテル」と「三宮駅」・「新神戸駅」を結ぶ専用シャトルバス運行(20分に1本)

■ 内 容

4:15 ~ 4:20

1) 開会の辞 Ouverture de la réunion

会長 小野村 敏信

Président T. ONOMURA

4:20 ~ 5:00

2) 一般演題 SESSION (English)

司会 大橋 弘嗣 / 弓削 至

Modérateur : H. OHASHI / I. YUGUE

1. Cyst-like lesion of bone following avulsion fracture of ankle in children.

- A case report -

Naoyuki KUGA*, Hiroshi HAGIHARA*

*Orthopaedic department, Sasebokyosai hospital, Sasebo

「小児の足関節剥離骨折後に生じた嚢腫様骨病変の1例」

佐世保共済病院整形外科

久我 尚之, 萩原 博嗣

2. Reconstruction of thumb with pollicization

Yasunori TANIGUCHI*, Munehito YOSHIDA*, Osamu ISHIDA**

Yoshikazu IKUTA***, Kenya TSUGE****

*Department of Orthopaedic Surgery, Wakayama Medical University, Wakayama

**Department of Orthopaedic Surgery, Hiroshima University, Faculty of Medicine, Hiroshima

***Department of Orthopaedic Surgery, Hiroshima Tetsudou Hospital, Hiroshima

****Hiroshima Hand and Microsurgery Center, Hiroshima

「母指化術による母指再建」

和歌山県立医科大学整形外科

谷口 泰徳, 吉田 宗人

広島大学整形外科

石田 治

広島鉄道病院整形外科

生田 義和

広島手の外科・微小外科研究所

津下 健哉

3. Health-related quality of life in relation to recent falls

Tadao TSUBOYAMA*, Toshikazu TAKEMURA*, Takashi ISHIBASHI**

Shuzo HASHIMOTO**, Takashi NAKAMURA***

*School of Health Sciences, Faculty of Medicine, Kyoto University

**College of Medical Technology, Kyoto University

***Department of Orthopaedic and Musculoskeletal Surgery, Graduate School of Medicine and Faculty of Medicine, Kyoto University

「転倒経験が健康評価に及ぼす影響」

京都大学医学部保健学科

坪山 直生, 竹村 俊一

京都大学医療技術短期大学部

石橋 孝, 橋本 周三

京都大学大学院医学研究科整形外科学

中村 孝志

4. Relationship between shape of medial tibial spur and medial meniscus in osteoarthritis of the knee

Mitsuhiro NAKAMURA*

*JA Onomichi General Hospital, Onomichi

「変形性膝関節症における脛骨内側骨棘形態と内側半月板の関連性の検討」

JA 尾道総合病院

中村 光弘

5:00 ~ 6:00

3) 特別講演 Conférence invitée

司会 瀬本 喜啓

Modérateur : Y. SEMOTO

"Surgical treatment of congenital scoliosis"

「先天性脊椎変形の外科的治療」

Prof. G. BOLLINI 先生 (Marseille 大学教授)

6:00 ~ 6:50

4) 帰朝報告 Rapport des échanges par l'AFJO

司会 青木 清 / 藤原 憲太

Modérateur : K. AOKI / K. FUJIWARA

日仏整形外科学会青年整形外科医交換研修

平成 12 年度 細野 昇 (HOSONO, Osaka)

平成 14 年度 滝川 直秀 (TAKIGAWA, Osaka)

平成 15 年度 矢吹 有里 (YABUKI, Tokyo)

平成 16 年度 和田 孝彦 (WADA, Osaka)

平成 16 年度 久留 隆史 (HISATOME, Hiroshima)

6:50 ~ 7:00

5) 総会 Assemblée de la SOFJO

会長 小野村 敏信

Président T. ONOMURA

6) 閉会の辞 Cérémonie officielle

名誉会長 七川 歓次

Président d'honneur K. SHICHIKAWA

7) 懇親会 Cocktail 7時00分より(学会終了次第)

ポートピアホテル南館1階 サファイアルーム

■ 学会参加費

3,000 円

第11回日仏整形外科学会

会長 小野村敏信

事務局: 大阪医科大学整形外科学教室

〒569-8686 大阪府高槻市大学町 2-7

TEL. 072-683-1221 代表 (内線) 2364 FAX. 072-682-8003

会学際 —— 週末願日米主式



第11回日仏整形外科学会

Bollini 先生来日顛末記

● Bollini 先生ご夫妻



快諾していただいた講演

第11回の日仏整形外科学会のBollini先生の講演は紆余曲折なく、すんなり決まったと記憶している。

なぜならば、Bollini先生は、瀬本先生の渡仏時代の旧友でもあり、私が2001年にマルセイユに留学していた時に大変お世話になった先生でもあったからだ。もちろん学問も手術もとび抜けており、特に先天性側彎症のBabyCDを使った手術は4、5回見せていただいたが全然オリエンテーションがつかないうちにあっという間に終わってしまい、神業のように見えたものだ。(第一助手のシルバン君もついていけなかったような……。で、講演していただく内容も、すんなり先天性側彎症の手術的治療について話していただくということになった。

はじめてメールで講演依頼してから、返事がくるまでは緊張した。ちょうど時期がSOFJOTやEUROSPINEが重なる時期でもあり、けんもほろろに断られることを覚悟していたが杞憂に終わった。

話は変わるが、留学で一番もめてしまうし、悲し

い気持ちになるのは宿泊問題である。私はモンペリエ・マルセイユ・パリを転々としたが、唯一事前に宿舎をきちんと準備してくれていたのがBollini先生だった。日本人である私はそんなことに非常に恩義を感じてしまうのである。ということで日本での宿泊はキチンとコーディネートしようと頑張った(つもり)。

来日されるまで何回かメールをやりとりして、奥様同伴で来られること、いろんなところを見て回るよけりな日本人的ツアーよりも、京都に腰を据えて近隣をゆっくり見て回り日本の文化に触れたいというなんとも高雅な希望があることがわかった。

ご希望の魚は「フグ」

いよいよ来日当日。もともとたいして喋れないフランス語が通じるかしらと心配しながら関空に迎えにいった。まったく変わらぬ温顔に接してほっとした。そこから神戸に向かったのだが、やはり日本という国は、初めての異邦人にはチョンマゲと現実のハイテク工業国といったところにギャップがあるようで、湾岸線沿いの工業地帯に非常に驚いていた。

車内での質問は以前案内したオーストラリアからの交換留学生とまったく同じ質問なので答え易かった。必ず聞かれるのが人口(大きい数字をフランス語できちんと答えるって

Prof. G. BOLLINI先生 (Marseille大学教授)

「先天性脊椎変形の外科的治療」

"Surgical treatment of congenital scoliosis"

司会 瀬本 喜啓 (Y. SEMOTO)



● 第11回SOFJOで講演されるBollini先生



なかなか難しい)。次は公害問題。で物価。食事といったところか。

奥様はウイトに溢れた方だった。日本通の友人から色々と情報を仕入れてこられており、話の途中でどうしても日本で食べたい魚があるということになった。単語が理解できず、秋刀魚とか鯛ぐらいかなとあたりをつけて喋っていてもどうも

かみ合わない。ふくらんで毒がある魚と説明されてフグだとわかった。なんでもフランスでは料理が禁止？されているらしい。あわててその晩の食事をお願いしている料理屋の板さんに電話して無理を聞いてもらった。初めての日本食の印象は、繊細でアーティスティックといった表現だったか、とにかくいたく気に入った様子だった。淡泊なフグの味わいも理解できている様子。さすが美食大国フランス。

講演はすばらしい内容

次の日の講演は、参加された先生方にはお分かりだと思うが、隠れた巨人ここにありといった素晴らしい内容だった。やはりフランス整形外科は奥深く侮れないと感じ、もう一度留学したくなった。懇親会では、今期の交換留学でマルセイユに留学する松尾先生のご家族にフランス生活のアドバイスをしていただいた。今頃は楽しく過ごされていることでしょう。

翌日は神戸の中華街で会食の後で、小野村会長と菊花展を鑑賞した。なるほど

日本的である。機会でもないとなかなかゆっくりと観賞できないものである。眼福でした。

その後は最終目的地である京都に向かった。ぜひ畳の生活を体験していただこうと日本旅館での滞在を二泊設定した。気に入ってもらえたのだろうか。

文化の日には三千院を案内した。山道に近い遊歩道を散策しながら、毎年参加している国境なき医師団でのボランティア活動や奥様のパリでの英語ガイド時代の話などを聞かせていただいた。その夜は瀬本先生ご推薦の店でフランス料理を皆で楽しんだ。少し意外な面持ちで、美味しいを連発されていた。日本人の食に対するこだわりについて少しわかってこられたようだ（私見だが世界でも各国の料理がすべて高いレベルで食べれる国は日本だけだと思う）。

あいにく日本の側彎症学会と重なってしまい夫妻とはこの日でお別れであったが、大変名残惜しい気持ちになった。去っていくタクシーにいつまでも手を振ってしまった。またお会いしたい気持ちにさせるご夫婦だった。まてよ、私がフランスへ行けばいいのか!?





整形外科医としての視野が大きく広がり、 今回の研修は素晴らしい機会でした。

関西医科大学 整形外科
和田孝彦 先生

人工関節で世界的にも有名な Cochin 病院で研修を行いました

平成16年度日仏整形外科学会の交換研修制度で4月から7月初旬にかけてパリ、Cochin 病院で研修を行いました。過去にこの研修制度で多くの先生方が研修された Cochin 病院ですが、同病院はパリ第6大学の附属病院で、パリ市内セヌ川の南方、第五区の南端でリュクサンブール公園から徒歩10分ほどの閑静な地域に位置します。

私の研修した整形外科はPabillion Ollierという整形外科専門棟内にあります。整形外科はサービスAとBという二つのグループから構成され、サービスAは関節外科が中心で、Courpied教授が主任教授、一方のBは腫瘍外科が中心でTommeno教授が主任教授でありました。私は Courpied 教授のサービスAで研修しました。サービスAは Courpied 主任教授、Matheu 教授、Vastel 先生、Hammadouche 先生のスタッフ医師に加え、Chef de clinic と呼ばれる医師3人、インターン医師が5人でした。

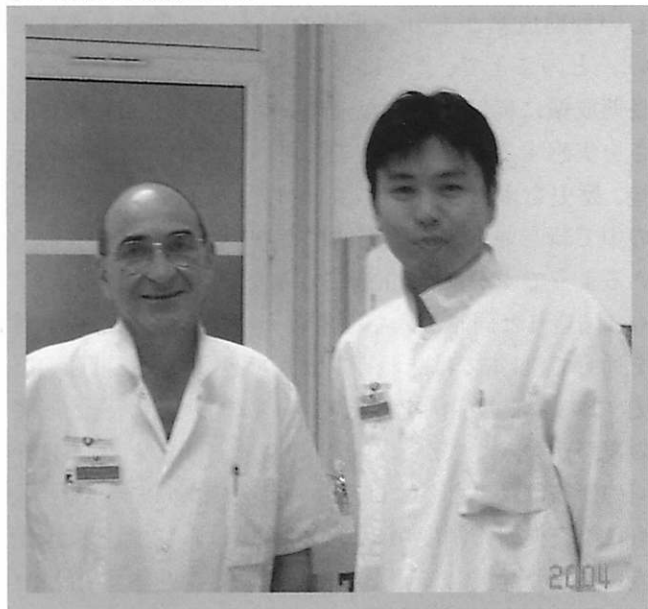


● Cochin 病院外観

インターンは様々な諸国から勤務し、私の訪問時にはチュニジア、レバノン、シリア、カナダ、ルーマニア、中国から来ていました。Cochin 病院初日は、フランス語というプレッシャーから結構緊張しましたが、自己紹介を何とか終え中国からのインターンにはじめて出会った瞬間は同じ民族というだけで気持ちが落ち着き、中国人に対する今までにない日中友好感を覚えた事が印象に残ります。

Cochin 病院は国立病院で、人工関節で世界的にも有名な病院です。過去の教授はMerle d'Aubigne 教授、Postel 教授、

● Courpied 教授とともに



Kerboull教授と有名な先生方ですが、特にKerboull教授はKerboull plateとして日本でも最近よく使われることでも有名です。

同病院では年間約800件の人工股関節置換術（再置換術も含めて）が行われ、フランスでは専門性が徹底されている関係もあり、色んなところから紹介されフランス内では最も手術症例は多いとのことでした。フランスの有名なジャーナルでも最も評価が高いようでした。

■ ■ ■ 美しい町並みと
颯爽と出勤する両教授

私は、病院から徒歩20分程のアパートを賃貸しました。13区の閑静な地域でしたが、古い建物ばかりで、ナポレオン3世の即位とともにパリは大改革され、パリの町並みは条例で150年以上もあまりかわっていないとのこと。町並みは風情があり、どこに行っても景観はとても美しく、パリは毎日歩いていても飽きることはありませんでした。朝出勤するといつも同じ頃にCourpied教授が愛車のジャガーで、Tommeno教授は60才にしてハーレーにまたがり颯爽と出勤されました。

私の1週間の予定は、毎朝7時45分から朝礼が始まります。前日の手術症例、救急患者が学生により紹介されます。月曜日はCourpied教授の外来を見学、火曜日から木曜日は手術、金曜日には抄読会、症例検討会

などが行われます。手術は基本的に手洗いして参加できます。月曜日と水曜日の午後5時半からはスタッフミーティングとよばれる術前症例検討が行われます。症例検討会は、術前の患者をミーティングルームに呼び診察し、また麻酔医、手術室看護師、病棟看護師も参加し手術へむけての検討を行います。

■ ■ ■ セメントマントルを殆どとらない手技、
そしてその成績には感嘆しました

フランスは整形外科の歴史も古く、国内には数多くのタイプの人工関節が存在するようですが、Cochin病院ではCharnley stemをmodifyしたケルブール人工股関節（Charnley-Marcell Kerboull : CMK）を使用します。手術は側臥位で大転子を骨切りしアプローチします。聞いていたもののセメントマントルを殆どとらない手技、そしてその成績には感嘆しました。Cochin病院は人工股関節の専門病院であることに加え、基本的にはCourpied教授の頭に骨切り術はないとのことでした。

ある金曜日の症例検討会で回転骨切り術のレントゲンがでてきたのですが、Courpied教授はこの手術は手技も難しく、フランスでは成績が悪いと発言されていたように思います。ただフランス全土で骨切りが否定されているわけではないようです。人工股関節に関してはKerboull前教授の人工関節（CMK）は20年以上で99%の生存率で安定した長期成績が報告されています。Courpied教授は手技そのものを若干modifyはしているものの数十年にわたり殆どの医師は手技を変えずに手術を行いつづけ、手技を継承しているとのことでした。また、外来では多くの患者さんの診察をみせていただきました。術後20年以上経過した患者さんも多く、その良好な術後経過や、またときにはとんでもない緩み、骨欠損例も見ることが出来ました。臼蓋部に使用されるKerboullプレートは日本でも最近よく使われるようになり、本院でも再置換術では頻繁に使われていることを説明しました。日本では京都市立病院の田中千晶先生のプレート（K-Tプレート）が流行しているであろうとコメントされました。

Cochin病院は大学病院であり、私が研修した3ヶ月間は同じポリクリグループが実習していました。整形外科になぜそんなに長くまわるのかと聞けば3ヶ月間周



期で次の科へ回るようでありました。医学部6年間で3年間は臨床実習だそうです。日本でもすこしずつ研修期間は長くなっていますが、フランス医学の臨床実習を重んじる体制にも感心しました。また、実習生がほとんど女性でしたが、現在は75%が女性とのことです。男性の学生にきくと毎日が素晴らしい環境で実習できるとコメントしていました。個人的にはうらやましい環境で、その学生のコメントに思わず納得でした。フランスでは高校卒業時にバカロレアという大学入学資格試験があり、合格すれば自分の希望の学部に行くことが出来るようです。しかし、医学部では1年から2年に進級する際にさらに振り分け試験があるようで、かなり合格率が低く女性の合格率のほうが高いことが要因ようです。

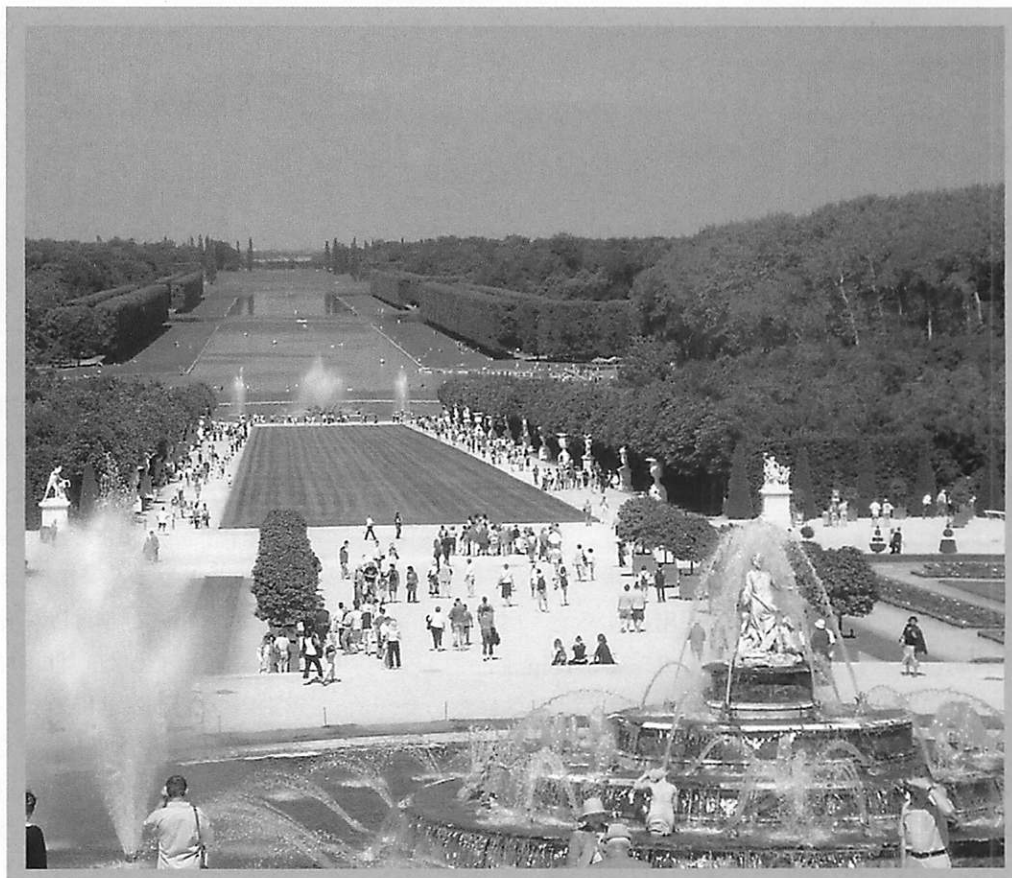
整形外科医としての視野が 大きく広がりました

Cochin 病院での研修後に Kerboull 先生（前教授）の手術を見学しました。Kerboull 先生は週に一度 private clinic（General de sports clinic という名の個人病院）で手術を行われます。最近では御自身が行われた THA の再置換術を中心に行われているそうです。Kerboull 先生は手術前は温厚に話をされていましたが、手術が始まると手術に対する厳しさに加え、その完成された手技とこだわりで感動を覚えました。

Cochin 病院で見ることでできた THA は、セメントテクニックを含め決して新しいものではありませんが、数年前に安永先生も報告されていますが、Courpied 教授曰く、“先人により 20 年以上のすばら

しい長期成績があり、手技を変える必要性を感じない。”とのことで、まさに長い伝統とそれに伴う良好な長期成績に裏付けされた確実なテクニックの素晴らしさを実感することができました。フランスは国自体伝統、歴史を重んじる（建物、町作りなどをみても）、その中で新しいものを独創的にとり入れ、国造りをしているようですが、Cochin 病院でみたフランス整形外科も、国造りと同じような印象を受けました。この3ヶ月を通して、日本では味わうことができない人工関節の歴史、また多くの症例を拝見でき、私の整形外科医としての視野が大きく広がったと自負しております。本当に今回の研修は私にとりすばらしい機会でありました。今後もこの交換研修制度がいつまでも続けられ、益々交流が盛んになり発展していくことを祈念いたします。

最後になりましたが、フランスでお世話になった Courpied 教授はじめ多くの先生方、そしてこのようなすばらしい機会を与えてくださった日仏整形外科の役員の先生方、ならびに飯田寛和教授、そして3ヶ月間快く送りだしてくださった医局の先生方に厚く御礼申し上げます。



●ベルサイユ宮殿の庭園

私達の フランス 研修

2

Mon stage, et apres.

昭和大学藤が丘病院
柁原 俊久 先生

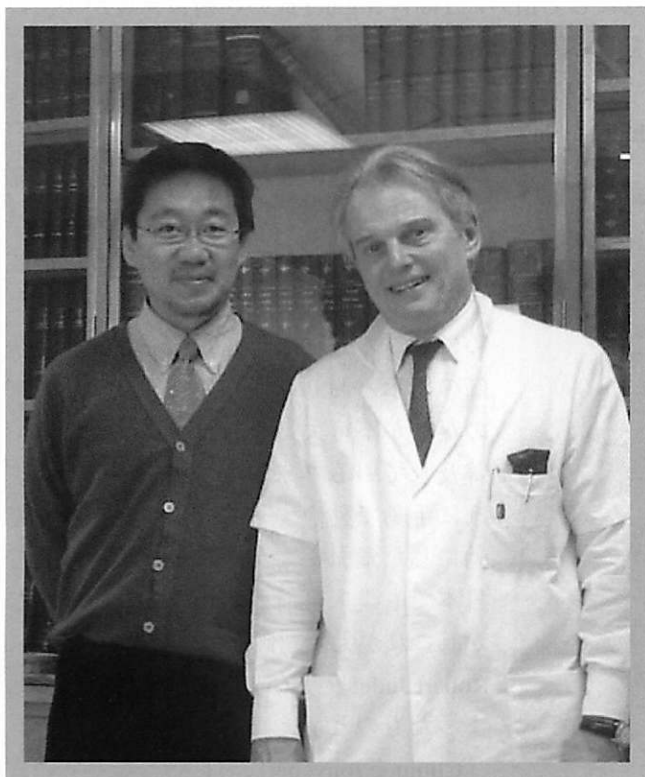
大変貴重な経験でした

平成15年度の交換研修医に選んで頂きパリ13区のPitie-Salpetriere病院、14区のCochin病院で合計3ヶ月を過ごしたのち、私は弓削大四郎先生のご紹介によりパリ16区にあるClinique Jouvenetに3ヶ月、そして金沢で開かれた日整会の際に来日されこれもまた弓削先生のご紹介によりお会いしたChristian Mazel教授のいらっしゃるパリ14区のInstitute Mutualiste Montsourisに

5ヶ月間お世話になりました。1年間で単に複数の病院で研修させて頂いたということに留まらず、国立の医学部を有する大学病院(Pitie-Salpetriere病院、Cochin病院)、完全なprivate hospital(Clinique Jouvenet)、そしてその中間に位置する共済組合系の大病院(Institute Mutualiste Montsouris)という3つの異なるカテゴリーの病院での生活を経験することができました。それは幸運にもいろいろな異なった立場で働くフランス人医師達の生活を垣間見られたことであり、また多くの海外からの研修医やフランスで働く多くの医療従事者達との接点を持つことが出来た大変貴重な経験と言えます。今回は大橋弘嗣先生にお願いして特別に紙面を割いて頂き寄稿致しました。昨年度の留学記と併せ、今後渡仏をお考えの方々のなにかの参考になればと思っています。

CLINIQUE JOUVENET

この病院は16区の閑静な住宅街の中にひっそりと佇むprivate hospitalで、主に整形外科と眼科の手術を行っています。整形外科は2つのセクションに分かれ、Henri Judet率いる関節外科・脊椎チームとPr. Gilbert、Pr. Le Viet率いる手の外科チームにより構成されています。Docteur Henri Judetは、かのRobert Judet教授の甥にあたり、パリ郊外GarchesにあるRaymond-Pointcare病院にいらっしゃるRobert Judet教授の息子Tierry Judet教授とともにJudet学派の手術を正統に継承するフランス整形外科学会(SOFCOT)の重鎮です(写真1)。



●(写真1) Clinique Jouvenetにて、Docteur Henri JUDETと

Robert Judet 教授の影響が色濃く残るこの病院では、手術台から細かい手術器具にいたる全ての道具に独創的な工夫が施されており、外科医は原則的に手術を熟知した看護師を相手に一人で手術を行っています。手術の手洗いができる資格を持った看護師はここでは主に手術助手として筋鉤を引いて術者を助け、器械出しの看護師はおかず、術者が器械出しも兼ねます。そのためには術者には当然器械に精通することが要求されます。たまにrevisionなどで人手が多く必要なときには事前に約束していたものと思われる医学生が筋鉤引きのバイトに来ている姿を見かけました。これらの点においては研修医を持たないprivate hospitalにおける医療の効率化への努力とその成果が感じ取れます。

私は主にDocteur Henri Judetについて股・膝関節の手術をみせて頂きましたが、private hospitalでありながらもこの時SOFECOTでのコンピューター支援手術の試行病院に選ばれていたため、フランス全土から多くの見学者が来院されていました。この時期にはまだナビゲーション自体が不安定でキャリブレーションを採るのに多少時間がかかりその間待たされる医師達が少し気の毒のように思われましたが、私が滞在している間にもコンピューターのup-gradeが頻回になされ、徐々に安定したシステムになってきていました。多くの来客を迎えているDocteur Judetの部屋の隣では、最も若いドクターが一人で人工股関節の手術を行っており、手術室の壁に印を付け自分がそちらを向くと白蓋の設

置角が45°になるように準備し、「これが私のコンピューターナビゲーション」と言い、軽くウインクしていました。

数々見せて頂いた手術の中で私が最も興味を持ったのが『牽引手術台で仰臥位で行う最小侵襲人工股関節置換術』です。この方法は既にこの病院のDocteur Thierry Siguierにより報告されておりますが、フランスでは一般的に普及しているJudet式牽引手術台(Judet table、こちらではtable orthopediqueと呼ぶ)を用いて仰臥位前方アプローチで行う方法で、大腿筋膜張筋と縫工筋および大腿直筋の間を分けて進入し原則として如何なる筋肉も傷つけません。これ以前からJudet学派で行われていたHueterの前方展開を熟知したdocteur達が発展的に行った方法であり、ただ皮切のみを小さくすることにとらわれない真の意味での最小侵襲といえるものです。実は同様の方法を2003年9月にPitie-Salpetriere病院で研修医が行っているのを見学したのですがこの際にはなかなかうまくいかず、隣で見ていた研修医の一人が「この方法をちゃんと見たいのなら、16区のClinique Jouvenetに行ってみよう」と耳打ちしてくれたのを覚えています。文字通り皮切は小さく、外から眺めていたのでは正しく理解できないため、懇意にして頂いたThierry Siguier氏の手術に何度か手洗いをしして間近で見せて頂きました(写真2)。

この方法を導入するにあたり唯一最大の課題は、Judet table無しには困難であること。この方法では脱臼

時に股関節過伸展、過外旋位が必要になるのですが、この肢位はJudet tableでなければ困難と思われます。加えて、この肢位をとる際の大腿神経損傷を回避するためにはこの方法を熟知し、Judet tableを医師の指示どおりに操れる外回りの看護師の存在が不可欠となります。フランスで普及している本来のJudet tableはこのように手動で動かすものですが、これを電動にした牽引手術台がある業者を介して日本でも購入可能と聞いております。しかしこれが大変高価なものとなっており、Robert Judet教授の本意とはかけ離れてしまったものと言えましょう。

Clinique Jouvenetにお世話になっている



● (写真2) Clinique JouvenetにてDocteur Thierry SIGUIERと

● (写真4) Institute Mutualiste Montsourisにて
“mes collègues” と

間に私は今いる1区のapartmentに引っ越したのですが、新居がパリの中心にあるため外国の要人が来るたびに通行止めにあったりMetroが止まったり、はたまた例によってフランス名物の水回りの悪さに悩まされたりで私は何度か朝一番の手術に遅れて登院しました。そのたび毎にMonsieur Judetは「あれ、どうしたの。顔が見えないから日本に帰っちゃったのかと思ったよ」と笑っておられましたが、一度「水回りがおかしくて、トイレの水が流れなくて。」と何気なく漏らしたところ、これがさあ大変。術者であるMonsieur Judetも麻酔のドクターも手洗い看護師も外回りもはたまたナビゲーターの技師までもが口々に「それはまず、不動産屋に連絡だ」「いや、その辺のapartmentだったら必ずconcierge（管理人）がいるはずだ」「私の知り合いに評判の良い修理屋がいるよ」「いや、簡単なものだったら、BHVで部品を買ってきて自分で直せるって」「いいかい、入居して間もないのだったら、クレームが効くからすぐお金を払っちゃだめだよ」と、ひとしきり手術の手を止めて、不慣れな私を心底心配してパリで生きていく上での知恵を授けてくれました。パリの人間が冷たいなんて嘘です。江戸の長屋の人情のようなものを感じたひとときでした。



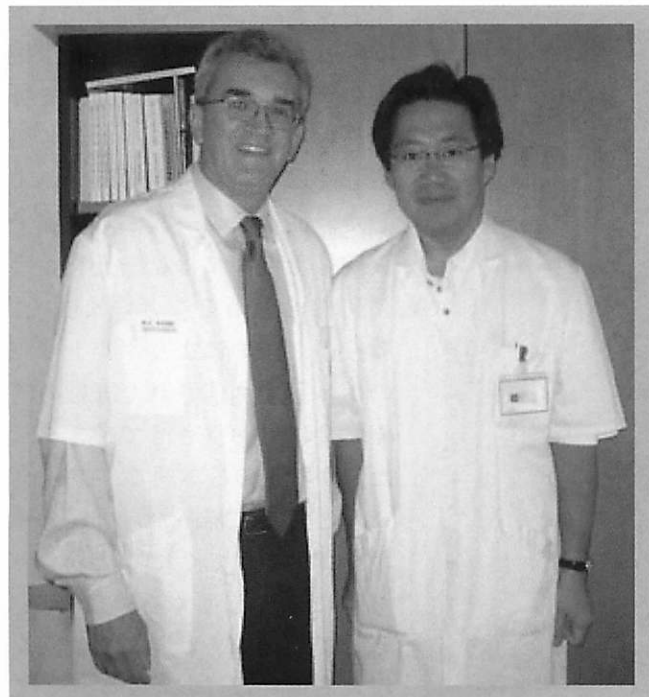
INSTITUTE MUTUALISTE MONTSOURIS

2004年3月から7月末までの5ヶ月弱、14区にあるInstitute Mutualiste MontsourisにてChristian Mazel教授のご指導を受けました（写真3）。

この病院は古い町並みが続くパリの中では珍しく近代的な1999年建造の建物で、市民の憩いの場であるMontsouris公園のほとりにあります。道路を隔てた向い側には、世界各国からの留学生が集う学園都市Cite Universitaireがあり空間的にもひろびろとした余裕が感じられます。

渡仏の直後の9月に挨拶にお伺いした際に教授が言われた「君が研修に来るからにはこの病院の中で君が行うことの全てに支障がないよう配慮する。」とのお約束どおり、早速院内職員用のバッジが渡され、これを付けている限り院内の全ての施設の往来が自由にでき、且つこのバッジがプリペイドカードになっており格安料金で院内のカフェやレストランが使用できました。加えて、常勤医師の部屋に私専用の椅子、机、そしてコンピューターまで用意して頂き、その言葉通りのご配慮に胸が熱くなりました。

この病院には、アルジェリアとシリアから勉強に来ている2人の研修医がおり、病院で生活していく上での細かい説明は全て彼等から受け、手術の合間には日



● (写真3) Institute Mutualiste Montsourisにて
Pr. Christian MAZELと

本同様に馬鹿話をしたり、私は主に彼らのカンファの準備を手伝ったり、彼らが休む際の穴埋めを行ったりという立場でしたが、この2人が私のフランス生活初めての“colleague: 同僚”といえます（写真4）。

加えて、同室の常勤ドクターである脊椎外科医の Pierre Antonietti、足の外科を専攻する Richard Terrache 氏らとは年齢が近いこともありすぐうちとけ、フランス整形外科のかなり詳しいところまでを日々の生活の中で教えてもらうことができました。

この病院には整形外科の手術室が2つあり、それぞれ先人の名を冠して、Salle Emile LETOUNEL と Salle Raymond ROY-CAMILLE と命名されています。さすがに Robert Judet、Raymond Roy-Camille の正統な後継者である Mazel 教授ならではの命名です。ちなみに、Clinique Jouvenet ではそれぞれの部屋に Utorillo や Cezanne などのフランスの画家の名前が付けられています。

この2つの手術台をフルに稼働させて、Mazel 教授を筆頭に脊椎外科医2名、関節外科医3名により月曜日から金曜日までひっきりなしに手術が行われます。さすがに教授の名声により多くの脊椎難治症例・脊椎腫瘍症例が集められてきますが、そればかりではなく関節外科、特に人工関節の症例も極めて多く、2004年度 Le Point 誌が選ぶ病院ランキングでは人工関節の部門でフ

ランス第3位に選ばれています。やはりここでは Mazel 教授の脊椎の手術を中心にらせて頂きましたが、Cage を用いた Interbody fusion や多椎間固定は言うに及ばず、私と看護師1人を相手に多椎間固定の revision や側彎の Instrumentation など3-4時間で仕上げてしまう腕前には感嘆の声を漏らしました。人工股関節はやはり、Judet 学派の流れを汲む table orthopedique を用いた仰臥位での方法が行われ、独創的な方法にこだわる Judet 学派を象徴してか臼蓋の revision には独自に考案した Montsouris plate なる plate を用いており、この他にも緩んでいないセメントカップを抜く方法や凹形リーマーを用いた臼蓋移植骨の採形法などのいろいろな工夫を惜しげもなく見せて貰いました。

Christian Mazel 教授はまさに私のフランス生活における初めての patron (ボス) であり、professeur (先生) といえます。渡仏直後に挨拶にお伺いした時から、「まずはフランス語をしっかりとマスターしなさい、それが研修の第一歩。そのためには映画のDVDを買ってまず英語で見てから繰り返しフランス語で見なさい。家ではなるべくニュースを流しておき、常にフランス語に耳を慣らしなさい。私はそうやって英語を覚えた。」との指導を頂き、教授のその極めて流暢な英語を聞くに当たり即座に納得し、早速帰りに FNAC でアメリカ映画『STUART LITTLE (小さなネズミが人間の言葉を喋る

やつです) フランス語版』を買って帰りました。研修中も私が手術のテクニックに関してする質問にはすべて丁寧にフランス語もしくは英語で答えて下さいました。研修医の一人が不整脈で入院した期間には私一人を相手に何件も手術をなさいました。教授のお誘いによりポルトガルのポルトで開催された脊椎の国際学会にもお供させて頂きました。かなりの日本通で、「Toshi、こんど日本に帰ったら屏風の値段を調べてきてくれ。」と言われた時には少し面くらいました。そして最後に、私がこの病院を離れる週には「我々を手伝って



● (写真5) Institute Mutualiste Montsouris の INFIRMIER 達と

くれたお礼に」とフランス整形外科の集大成 A T L A S D E CHIRURGIE ORTHOPEDIQUE 全3巻をプレゼントしてくださいました。これは私の一生の宝物となりました。

いろいろな意味でこの病院での5か月間は、私がフランスの医療界、もっと言えばフランス人の仲間としての枠の中に足を踏み入れていく上での極めて重要な step であったと認識しております（写真5）。

■ Et apres

現在私は再び Cochin 病院の Service A に戻り Jean-Pierre Courpied 教授のもと、各国からの研修医達と助け合いながらすっかり、colleague の仲間入りを果たした感があります（写真6）。最近では Service B の Tommeno 教授、Anract 教授にも顔を覚えて頂いたようで骨・軟部腫瘍の症例を覗きに行ったりもしています。渡仏当時は、言葉の壁やあまりに違うシステムや価値観から強い疎外感に苛まれたこともありましたが、片言でもフランス語を使うように努めひとたび colleague の片隅に加わってしまうと、「仲間なんだからケチなことは言わないさ」的な太っ腹なフランス整形外科医達。こうした考えは、理髪外科を“外科学”に進歩させ、整形外科に発展させた子孫の中に、やや閉鎖的ともとれる中世ヨーロッパのギルド的なにおいを漂わせながら受け継がれています。地球の裏側にはアメリカに“oui, d'accord”と言わないもう一つの別の世界があることを身をもって知りました。そして、最終的にはこのフランスを頼りにしている多くの国があることも。日本に居ながらフランス整形外科の情報を得ることはやはり困難と思われます。フランス整形外科が知りたければ是非フランスに来て、彼らのなかで生活して、フランスでの生活を十分楽しんで、そして理解して下さい。後に続かれる先生方のフランス滞在が有意義なものに、そしてフランスでの生活を心から楽しんで頂けることを願ってやみません。



最後に、小林晶先生の御寄稿にある Fourcroy の言葉を引用して、

『Peu lire, beaucoup voir, beaucoup faire（あまり読みな、みることなすことを多く）。』

フランス からの 研修生

平成16年8月11日より25日まで、Brice Ilharrborde 先生が総合せき損センターにて研修されましたので、ご報告いたします。

—— フランスからの交換研修生を受け入れて ——

カラオケ・お好み焼き・焼き鳥・焼き肉・花火大会…… 日本の夏と庶民生活を中心に歓迎しました

労働者健康福祉機構 総合せき損センター整形外科
弓 削 至 先生

●お好み焼きが最初の食事

8月10日関西空港に到着され、同日、新幹線にて福岡に来られました。最近、福岡も外国人が多く、何人かの外国人が改札口から出てこれ、誰に声をかけるか躊躇しましたが、先方も人を捜している様子で声をかけてやっと会う事ができました。大都市圏では、より見つけることが困難と思われる、フランスから研修に来られる先生の写真が必要と痛感致しました。Ilharrborde というスペルで、てっきりアラブ系フランス人と勝手に想像していたので、本人に会って驚きました。元々、バスク地方の出身とのことでパリ市内でも非常に珍しい名前との事でした。また Ilharrborde 先生はアメリカ留学の経験があり英語が堪能で、当方の拙いフランス語が通じない時は英語で会話ができて、相手がどう質問するかという先読みが鋭く、「非常に優秀な人だな」と言う第一印象でしたが、それもそのはずで、フランス全土のintern4600人中9位の成績と言う事でした。夜9時過ぎに飯塚に着き、荷物を整理した後、ちょうど当センターの独身者がお好み焼きを食べに行っている日だったので食事に誘い、来日した最初の食事がお好み焼きと焼酎でしたが、全てたいらげてしまい、その好奇心の強さとタフさに驚きました（翌日からの昼ご飯の弁当の漬け物を全て食べられていた事を拝見し、その好奇心の旺盛さに感嘆したことを思い出します）。



●せき損センターにて

翌11日から本格的に研修に入りました。初日はスタッフの紹介と病院内の案内そして、その日から頸椎椎々弓形成術と急患（腰椎破裂骨折）の手洗いをしてもらいました。結局、8月11日から25日までに手洗された手術は頸椎々弓形成術5例、頸椎前方固定術1例、腰椎部分椎弓切除術4例、腰椎後方除圧固定術3例、腰椎骨形成的椎弓切除1例、腰椎破裂骨折（急患）3例の計17例でした。頸椎々弓形成術、頸椎前方固定術及び腰椎骨形成的椎弓切除に非常に興味を示され、多くのレントゲン写真をデジカメに熱心に撮っていた事が

印象に残っています。腰椎破裂骨折では手術適応と手術法に関して楽しい議論になりました。この他、外来見学、術前の説明と同意への参加等、非常に内容の濃い研修でしたが、常に好奇心を持ち精力的にこなされていました。8月17日は多目的ホールにて「パリの病院」と題して職員の講演をお願いし、40名以上の参加があり、盛況のうちに終わりました。講演の後に医局で歓迎会を開き、その席でフランスと日本の脊椎外科の共通点と相違点を議論し、そして、機会があればフランス側と共同研究ができればと語り合いました。



●浴衣で花火大会

平日のアフターファイブは、「大阪ではきっと高級料亭が待っているはず」と期待して、飯塚ではカラオケ・お好み焼き・焼き鳥・焼き肉・花火大会と日本の夏と庶民生活を中心に据えて歓迎いたしました。花火大会は8月16日にあり、知人から浴衣を借りて一緒に扇子を持ってビール片手に見物しました。地元の小さい花火大会でしたが、間近で花火を見ることができたと喜んでもらい非常に楽しい思い出になりました。土日は太宰府・福岡、湯布院～阿蘇観光、萩観光及び脇田温泉にてリフレッシュと北部九州と山口を堪能してもらいました。

●雨の萩にて

萩では観光途中大雨に祟られましたが、雨宿りの喫

茶店にてみんなで過ごした一時もいい記念となりました(その時の写真を掲載しています)。この他、テニス、ダーツ等も一緒に楽しみ、その万能ぶりに驚愕しました。

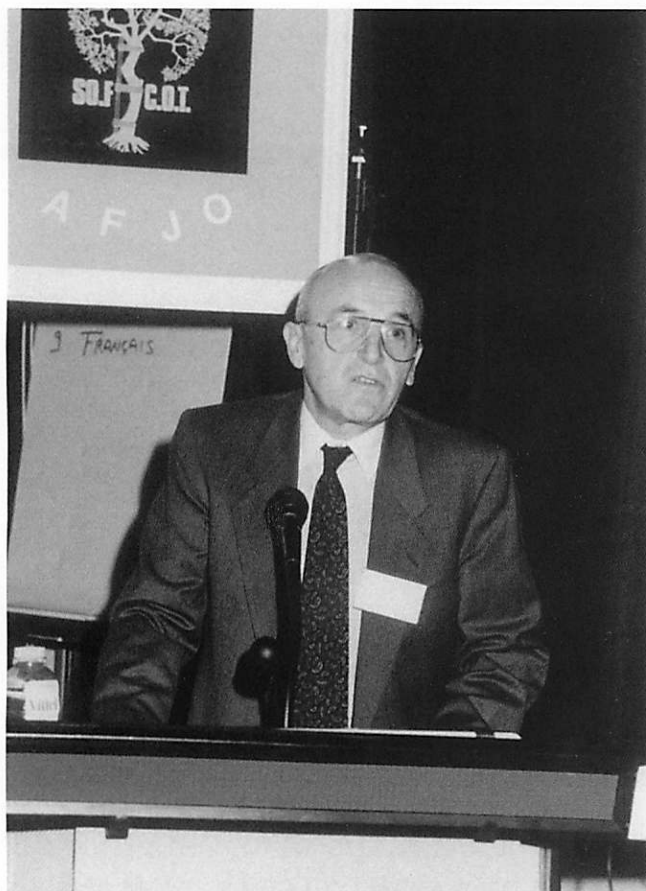
●心に残る交流でした

8月25日に福岡を出発されましたが、別れ際は2週間に渡って一緒に相手をしてくれた友人達と感傷的な涙のお別れになり、短い間でも心に残る *sympathique* で爽やかな青年医師との交流でした。

その後もメールのやり取りをして交流を深めています。このような貴重な機会を与えてもらった日仏整形外科学会の役員の皆様にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

輝しい一つのエポックが終わって、 これから新しい時代が始まる

七 川 歆 次 先生



●第1回 AFJO 会長を務める在りし日のシャルル・ピコー
(1990年11月 Paris, Palais, des Congrès)

今年の初めに来た Merloz 教授からの手紙は、ピコー先生の死が AFJO にとって大きな痛手であり、良き organizer を失ったことを悔む文面であったが、日本の会員にとっては、すぐれた organizer 以上の人を亡くした思いであるだろう。

ピコー先生はクルピエ教授らとともに AFJO の創設にかかわり、最初のフランス側会長として、1990年から1994年まで AFJO の発展に盡力された。緻密な計画と並々ならぬ熱意をもって行動され、会長を退いてからも AFJO の最も大きな支えになってきた。2年毎に開催される AFJO に、時には100名近くになる日本の学会参加者を受け入れ、日本での開催時には、60～80名のフランスからの参加者の滞在スケジュールや学会プログラムまでピコー先生を煩わすことが多かったのは、ピコー先生が AFJO の原動力となっている証拠である。

コレール教授が会長をした1998年のリヨンでの AFJO は、私には殊の外印象的であった。学会における日本側からの発表がすぐれていたのみならず、討論が英語でなされたので、リラックスして皆よく喋っていて、横の席にいたピコー先生が“よかった、よかった”と真底嬉しそうで、私も同感であったが、会の成果を誰よりも気にしていた先生の面目がよく出ていた。会の後、大学の会場横の医学史博物館に参加者が案内された。これも私には頗る興味がもたれたが、博物館への道案内が少し手間どると、ピコー先生が軽い身のこなしで小走りで聞きにまわられるのを見ていて、まるで日本人のような気の使い方だと思心したりした。ピコー先生はその後日本の学会参加者全員をご自宅に招待された。おそらく日本の誰もが AFJO の忘れ難い印象を懐かれたものと思っている。

AFJO のフランス人側役員は皆ピコー先生に近い人で、会の運営は順調であったが、一度だけうまく

行かなかったことがあった。

2000年の後半になって、翌年5月に大阪で第6回AFJOが予定されているにも拘らず、日本の事務局がフランス側と連絡がうまくとれなくなった。コレール会長以下役員のほとんどが辞任して、機能が停止状態になった。なかなか埒が明きそうにもないので、私は久しぶりに、この年の11月にあったパリーでのSOFCOT（フランス整形外科学会）に出席して、フランス側の事情を確かめ、うまく運営してくれるように頼むことにした。クルピエ教授に会うと、“大丈夫、大丈夫、うまくするから”というもののように陽気な顔で言ってくれたが、細かいことはいわなかった。副会長であったコレール教授に、辞任を思いとどまるように、そう言ってほしいという日本側の要望もあって、小児の足の外傷の教育講演をしている部屋に会いに行った。コレール夫人が外の廊下で佇んでいたので要件を話すと、体調が悪いので私が付いてきたと言っていた。講演が終わってコレール教授に会うと、案の定心臓の調子がよくないということで引き受けてくれなかった。ピコー先生に会うと、コレール教授は住所がわからず、連絡がとれないということであった。宜しくといって帰ってきたが、ずっと返事はなく、日本の事務局の困惑は増すばかりであった。そこで私はパリーの友人が2001年3月にシンポジウムをするのに誘われていて、日本で用事があるって行かない積りであったが、無理をして出かけることにした。それはクルピエ教授に会い、ついでリヨンに行ってピコー先生に会うことにしたからである。するとピコー先生から連絡があり、自分がパリーに行くから一緒にクルピエ先生に会おうということであった。但し偶然病院の前で出会ったということにしてほしいということであった。クルピエ先生の教授室で三人で話をして、新しい役員のリストを見せてもらい、その後病院の

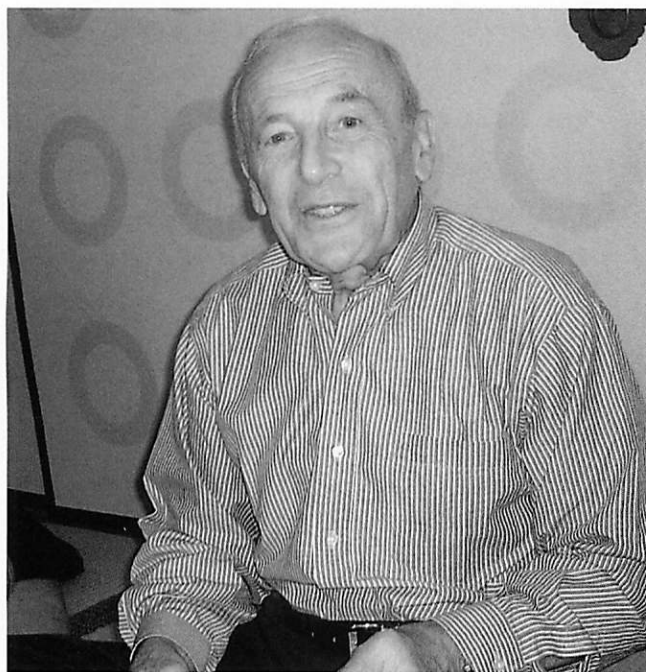
前のレストランで昼食をとることになった。AFJOのフランス側の次の会長に予定しているGazielly先生も呼んであるということであった。私にとっては懐かしいCochin病院前の小さなレストランには、今も若い医者達大勢で、私は一瞬タイムスリップしたような気持ちであったが、奥でGazielly先生が待っていた。

レストランを出て、サン・ミッシェルの地下鉄の駅でピコー先生と別れた。これからすぐリヨンに帰るとのことであった。私はパリーに他の要件でもあるのかと思っていたら、AFJOの件だけで来られたらしい。相かわらず軽い身のこなしで、さっさと消えていった。私はその時、このような一途な人がAFJOを築きあげたのだと思わずにはおれなかった。

我々がピコー先生に巡り会えたことは、極めて幸運であった。彼とともに、輝しい一つのエポックが終わった。そしてこれから新しい時代が始まるのだという思いで一杯である。

ピコー先生を偲んで

小野村敏信先生



●第6回 AFJO(奈良にて)

ピコー先生が亡くなられた。グルノーブルでの第7回AFJOのあと、参加者全員がリヨンにお招きを受け、楽しい一泊をピコー先生のお宅で過ごしたのは、ついこの間のことであったのに。

私とピコー先生とのおつき合いは約30年ほどになる。そのころリヨンのセントロ・ド・マシュエを訪ね、当時スタニヤラ先生が極めて重度の脊柱側彎ばかりを精力的に治療しておられるのをみて感動し、躊躇なく教室の若いひとを勉強に送ったが、スタニヤラ先生のあとを引き継がれたのがピコー先生であり、急速におつき合いが深まることになった。私の主催する日本の学会でお話していただいたこともあるが、AFJOを通してのことは皆様よくご存知のとおりである。この人なくしてはこの会の発足・運営はこのようにスムーズには運ばなかったかとも思う。

私の立場として、これまでの日本の整形外科への先生のご貢献に触れなければならないが、長くなるので、2002年に先生を日整会の海外名誉会員に推挙するに当たり、理事会での検討の資料として提出したものを別に掲載する。日整会の海外名誉会員はここ10数年決められたことが無く、ピコー先生はこのことを非常に喜んでおられた。

日本の整形外科医がリヨンにいる限り、ピコー先生が奥様とともに親身にお世話下さったという思い出と感謝は、われわれの世代だけではなく現在の交換研修の世代のかたがたも等しく感じておられることであろう。

慎んで先生のご冥福と、残られた奥様のご多幸をお祈りいたします。

(平成 14 年 2 月、名誉会員推薦にあたって、日整会理事会への資料)

1) 日仏間の整形外科学交流に関する貢献

シャルル・ピコー先生は以前より日本の整形外科に関するご関心ならびにご理解が深く、1990 年に設立された日仏整形外科合同会議 (AFJO) には、フランス側の代表としてその発足に大きな貢献をされました。パリで開かれた第 1 回合同会議では議長として 80 名をこえる日本側参加者を温かく迎えていただきました。以後本会は 10 年以上にわたり回を重ねておりますが、その内容も 2 年に 1 度の学術集会のみならず、青年整形外科医の交換研修、日仏整形外科医の合同研究へと発展してきました。このような形での国際交流は他の国との間では例をみないものであると考えております。ピコー先生は AFJO のフランス側の会長を 4 年間、名誉会長を 4 年間されたのち、現在は名誉会員となっておりますが、今日もなお日仏間の整形外科の交流に積極的にご尽力いただいております。

2) 学術的な貢献に関して

フランス整形外科学会 (SOFOT) 学術集会の会長を務められたピコー先生のご専門は関節外科、脊椎外科の領域ですが、これまで何回にもわたって来日され、整形外科関連学会あるいは各地の大学においてその成果を披露され、わが国の整形外科学の発展に大きく寄与されました。本年の第 75 回日整会学術集会 (井上一会長) では招待講演をされる予定であり、また本年 10 月に青森市で行なわれる第 10 回日仏整形外科学会 (SOFJO: フランスに関心を持つ整形外科医の日本での学会) においても招待講演されることになっております。

また数年前から始められた日仏両国による整形外科合同研究についても常に助言や指導をされており、その成果はすでに論文としてまとめられ、高い評価を受けております。

3) 青年整形外科医の日仏交換研修に関して

ピコー先生は 1990 年に始められた日仏の若手医師の交換研修制度に力を注がれ、この制度の事実上の責任者として、現在もフランス側の研修医の選抜や、日本側研修医の受入れ施設の斡旋に努力されております。これまでこの制度にフランス側から 14 名、日本から 27 名が参加しましたが、日本側の参加者がそれぞれ希望する専門領域についてグレードの高い病院で研修できたことは、フランス整形外科学会において信頼度の高いピコー先生のお人柄とご尽力によるところが大きいのと思われます。また日本からの研修医の多くがピコー先生のご自宅にご招待を受けるなど、公私にわたりお世話になっております。

以上述べましたようにシャルル・ピコー先生は日本に心からの親近感をお持ちであり、今後とも日仏両国の懸け橋となっていただけの方であると存じます。

シャルルの思い出

福岡整形外科病院顧問

小林

晶先生



●（写真1）大分湯布院温泉にて（2002年5月）

シャルルーと何時も呼んでいた一が亡くなったという知らせほど、強い衝撃を受けたことはない。その数日前に、今年異常に多かったわが国の台風や、さらに追い打ちをかけた新潟中越地震の見舞いのメールを貰ったばかりだったのに！

「お前はリヨンのことはよく知っているので話し易い」お互い tutoyer で話し始めたのは、識りあって間もなくの頃であった。あの暗い秋から冬にかけての空から、一挙に眩しい晩春の陽光がさした想いであった。

彼の根からの親切的他人への優しい思いやり、思慮深いしかもユモアを交えた話し方、機敏な行動などは、多くの彼に接した人から語られるであろうから、敢えてここでは繰り返さない。

彼とは二人だけで二度旅行したことがある。最初はオリエ没後百年祭で、プロヴァンスのレ・ヴァンヘリヨンから参加した時である。2000年6月のことで、南フランスは夏を思わせる暑さであった。彼の

車のクーラーは故障して、車内の暑さも相当なものであった。レ・ヴァンまでの220kmの後半はプロヴァンス特有の石の家と石灰岩に富んだ山が続き、セザンヌの絵を見るような景色である。シャルルは少し廻り道をして、ヴァランス、モンテリマルを経由したのち、アルデーシュ峡谷（Gorges de l'Ardèche）をわざわざ見せてくれ、レ・ヴァンの3日間も汗をかきながら、きめ細かく村長以下の人々やフランス全土から参加した整形外科医の面々を紹介、土地の案内に気を遣ってくれた。東洋から唯一の参加者ということで、地元紙の記者に囲まれた私を、シャルルは例の軽妙洒脱な語り口で先ず紹介し、オリエの展示品の前まで連れてゆき、その前でインタビューの写真を撮らせる配慮もしてくれた。

フランス医学界の学閥は相当なもので、場合によってはわが国以上のものがある。パリ学派は当然一緒になり易いが、そのサークルの中にも私を連れてゆき、くどいくらいに AFJO と私のことを紹介してくれた。

人を飽かせず、心配させず、気に入るように寛がせるというのが、彼の根本にあるもてなしのエスプリであった。

二回目の二人の旅は2002年5月の九州の温泉巡りであった。その国を知るには、田舎に行き庶民の暮らしを経験した方が良く、というのが、私の海外旅行の信条であって、シャルルにも是非一端でもよいからどうか勧めたのである。

湯布院温泉では、和式旅館に泊り、日本人がやるように裸で入湯し、浴衣で歩き和食をとるスタイルであった（写真1）。彼は何の抵抗もなく、しきたり通りに振る舞って、お世辞無しに素朴で快適な環境を褒めてくれた。

人吉でも球磨川沿いの和式旅館に泊り、翌日の急流の川下りを楽しんでもらった。

人吉のような九州の涯に居ても、孫娘の土産が気になるらしく、人形を求めたい希望があった。こんな田舎に人形屋の存在をいぶかったが、立派な店を運よく見つけ、結局買ったのはフランス人形で、二人で大笑いをしたことであった。

彼の博物学への興味と豊富な知識は余り人に知られていない。目にする動植物の名前を必ずフランス語で教えてくれた。レ・ヴァンでは緑が多く、夾竹桃や菩提樹が至る所にあり、laurier-rose, tilleul と指差しつつよく。人吉では球磨川の上を飛ぶ鳶を Voilà, milan ! と何時までもその飛翔を眺めていた。土手を散歩して釣人がいると魚籠をみつめ、一々魚の名前を言うのであった。

名もないような小さな昆虫などは、最も関心を引きらしく、libellule（とんぼ）が小さい時は demoiselle と呼ばれるなども教えてくれた。

この九州旅行の終わりに高速道で、スピード違反で私は捕まった。シャルルの心配は尋常ではなく、切り札として「この外人を空港まで送るのに時間が無く、スピードを出したのはそのせいだと言え」と方便まで用意してくれた。もちろん駄目であったが……。

シャルルとの交流の思いでは尽きない。AFJO を何としてでも継続、発展させることが彼に対する報恩の途である。1990年の第1回 AFJO 会長の姿を偲んで（写真20ページ）、哀悼の意を彼と最愛の伴侶ジュリーに捧げたい。

ピコー先生の思い出

瀬本喜啓先生



● (写真左) 第10回日仏整形外科学会 弘前にて
● (写真右上) 第5回AFJO リヨンにて
● (写真右下) ピコー先生宅にて



本会の名誉会員で、日本整形外科学会の名誉会員でもあるピコー先生が、11月21日フランス時間午後3時45分、胸膜の癌のため他界されました。

昨年6月ごろから咳をされていて、胸膜の癌が発見されたあと化学療法を受けておられたそうです。奥様や嫁がれたお嬢様には、病状について「心配しなくてもよい」といつも元気にされていたとのことですが、11月19日呼吸困難のため入院され、2日後の21日に息を引き取られました。前日の夜は苦しめたそうですが、夕方には静かに眠りにつかれたそうです。ご葬儀は11月26日にリヨン2区の11世紀に建てられたAinay教会で行われ、多くの友人の方々やご親戚の方に囲まれ、追悼のごミサが行われ

たそうです。在リヨン日本領事の青山氏も出席されたそうです。

謹んでご冥福をお祈りすると共に、日仏整形外科学会創立以来、本会の発展のため献身的に貢献していただいたピコー先生に感謝と哀悼の意をささげます。安らかにお眠りください。

ピコー先生に初めてお会いしたのは、1982年の10月でした。私は、当時側彎症で有名だったリヨンのマッシュューセンターの整形外科医だったピコー先生のもとに、1年間の予定で留学生活を始めるところでした。先生のお部屋で初めてお会いした時、先生は私がフランスに来る前に山ほど書いた書類の何枚かを見ながら、どんなことを勉強したいかなどを尋

ねられました。大変紳士的で色々とお気使っていただき、自ら病院中を案内しながらスタッフに紹介していただきました。

月曜日から金曜日まで、毎朝7時半から股関節の全置換術を1件行い、9時には手術を終え、看護婦さんが毎朝買って来るフランスパンにバターとジャムを塗って食べ、カフェオレを飲むのが日課でした。その後ハリントンロッドを用いた側彎症の手術を3時ごろまでには終え、そのあと外来や手術検討会を夕方まで行っていました。手術検討会では、まだ言葉の壁があった私に、「こんなとき日本ではどうしているのか」とよく聞かれました。毎日ピコー先生の傍で過ごしたことが、以後、私の疾患に対する基本的なものの考え方の大きな原点になったと思います。

常勤の外科医はピコー先生一人で、私が行く前は医学部の5回生か6回生を助手にして手術をされていたので、少しは手術のできた私が病院に研修に来たことで「大変助かったよ」と何年も後でおっしゃっていました。

リヨンの人は保守的です。このように毎日一緒に仕事をしていましたが、ご自宅に呼んでいただいたのは半年もたってからでした。それまでスキーに連れていただいたことはありますが、ご自宅には呼んでいただけませんでした。紹介もなくまったく初対面の場合、リヨン人はなかなか自宅には招かないとのこと。自宅に招いていただけたということは、やっと知人の一端に加えていただいたということ。なかなか親密にはならないけれど、一度気を許したら一生の付き合いをするというのがリヨンの人なのだそうです。ピコー先生も典型的なリヨン人でした。

日本に帰ってから20数年になりますが、こんなに深く、また家族ぐるみでお付き合いさせていただいたフランス人はピコー先生と奥様だけでした。

日仏整形外科学会とフランス整形外科学会が合同で交換研修をしようということが決まり、日仏整形外科協議会(AFJO)が設立されました。ピコー先生はこの協議会の設立にフランス側代表として、多大な貢献をされました。この協議会のもと、毎年両国2名ずつの青年整形外科医交換研修が始まったのは1990年のことでした。それから15年間で日仏合わせて49名の医師が交換研修プログラムにのっとり日仏両国で研修されました。当初この交換研修はお互いの生活習慣や経済状態の違いなどからさまざまな行き違いや誤解がありましたが、それを一つ一つ丁寧に解決し、特にフランス側の交換研修受け入れ責任者として多くの日本人の先生方をお世話していただきました。空港に出迎えていただいたり、ご自宅に招待していただいたり(初対面では考えられないことです)、趣味の狩猟につれていただいたりなど、本当に親身になってお世話くださいました。多くの先生方から日本側の事務局にお礼の言葉を頂いています。

また、ピコー先生が1990年のフランス整形外科学会(SOFCOT)会長になられた時、日本側との合同会議を開催することとなり、第1回日仏整形外科合同会議(Réunion de l'AFJO)がSOFCOTの前日にパリで開催されることになりました。日本からの参加者はDéfanceの新凱旋門の最上階でのパーティーに招待され、本当に楽しく貴重な経験をさせていただきました。第2回AFJOは七川欽次先生のもとに京都で開催され、多くのフランス人医師とともにピコー先生ご夫妻も来日されました。以後、2年毎の合同会議には毎回ご出席になり、中心的な役割を果たしてこられました。本年5月に京都で開催される第8回AFJOにも奥様と二人で来日の準備をされていましたが病状が進行し、もうお目にかかれないこととなり残念でなりません。本会名誉会長の七川欽次先生

はじめ、交換研修の責任者をされている小野村敏信会長、故菅野卓郎副会長、小林晶副会長とも親交を深められ、先生方の渡仏に際してはいつも自宅やレストランでの食事などに招待されました。ピコー先生は、日仏間の整形外科の交流に積極的にご尽力いただいた先生でした。

また学術的にもフランス整形外科学会の会長を務められ、関節外科、脊椎外科の領域で、これまでに何回にもわたって来日され、整形外科関連学会あるいは各地の大学においてその成果を披露され、我が国の整形外科学の発展に大きく寄与されました。2002年の第75回日整会学術集会（井上一会長）では招待講演をされました。

このことが日本整形外科学会でも評価され、2002年の日本整形外科学会において名誉会員に推薦されました。

ピコー先生の思い出は公私を交えて数多くあります。先生は「名前呼び合おう」とおっしゃっていたのですが、年齢が離れている上に、社会的にも高い地位の先生に対して長い間どうしても「シャルル」とよべず「ムシュー・ピコー」と呼んでしまいました。そのたびに「ノン、シャルルと呼んでくれ」といって悲しい顔をされていました。ここ数年の間に、やっと「シャルル」と呼べるようになったところでした。

昨年11月21日にジランさんからピコー先生がなくなれたと電話を頂いたときは、呆然としてしまいました。私たちだけでなく、奥様やお嬢様にも、ほとんど病状は知らされていなかったとのこと。知らせて悲しませたくなかったと最後におっしゃっていたそうです。数年前に心臓弁膜症のため手術をされたときも、「ちょっと入院してくる」程度の簡単な説明だけで、家族や周りの人たちも退院後に心臓



の手術をしたと聞いてびっくりしていたくらいです。奥様に対してはとことん優しく、家事以外のことはほとんどすべてピコー先生がなさっていたとのこと。今回の入院前も、庭の木が伸びているので庭師に電話をしてから入院されたそうです。

ピコー先生の存在が大きかった分、奥様はひどく落ち込まれています。昨年の12月30日にピコー先生のお墓参りに行ったとき、奥様はやつれ果てて全く放心状態で、話すたびに泣きぐずれ、大変悲しい訪問でした。私の人生はシャルルと一緒に終わったとおっしゃられ、ほとんど外出することもなく、一人で家におられます。何とか立ち直って元気になれることをお祈りします。お墓はリヨンの市内にあり、土葬のためまだ墓石などが未完成のままでした。奥様は今年のAFJOを必ず成功させて欲しいとおっしゃっていました。

今年のAFJOを成功させ、今後の日仏の交流をさらに発展させることが、ピコー先生に対する最大の供養になるものと信じています。

ピコー先生のご冥福を心からお祈りするとともに、残された奥様の力になることができればと願っています。合掌。

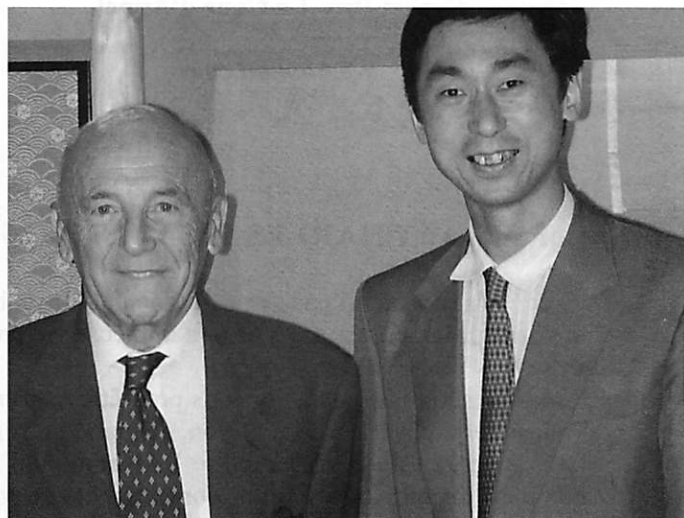
ピコー先生の思い出

大阪府済生会中津病院 大橋弘嗣先生

●第7回 AFJO リヨンでの晩餐会



●ピコー先生と（1999年10月1日）



ピコー先生のご逝去、心よりご冥福を申し上げます。

日仏整形外科学会のお手伝いをさせていただいてから何人かのフランス人医師と顔を合わせるようになりました。中でもとりわけピコー先生は私たち日本人メンバーひとりひとりに対して心を配られ、私のようなものにまでよく声をかけていただきました。自分勝手ですが、いつの間にか私にとってはリヨンの頼れる父親的存在になっていました。フランス整形外科におけるピコー先生の立場を考えれば厚かましい話ですが、そう感じさせないところにピコー先生の人間としての偉大さがあったのだと思います。今になれば、ピコー先生にお世話になったことばかりが思い出されます。

そのなかでも一番お世話になったのは、リヨンでの手術見学をお世話していただいた時です。渡仏前からスケジュールなどについて打ち合わせをしていましたが、そうこうするうちにフォアグラは食べられるかとか、カエルは食べられるか、カタツムリは食べられるかなど食事の打ち合わせに変わっていました。リヨンに到着すると空港まで向かえに来ていただき、そのままボージョレーのお母さんの家に招待していただきました。ここからリヨングルメツ

アーが始まりました。その後リヨンに滞在した3日間、つきっきりでお相手をしていただき、観光案内とともに毎昼食、毎夕食と本場のフランス料理をごちそうになりました。さすがに2日目、3日目となると私たちの方は次第にお腹が苦しくなってきましたが、ピコー先生はお歳にもかかわらず私たちと同じペースで食事を取っておられ、その健啖ぶりに驚きました。もちろん、手術見学もアレンジしていただき、リヨンの滞在を十分に満喫させていただきました。

その後も幾度となく楽しい思い出を作っていたが、少しでも恩返しをしなければと思っていたところに突然の悲報が入り驚きました。2003年のAFJOの際、グルノーブルでまだまだお元気なお姿を見ていただけに信じられない気持ちです。今でも優しい言葉をかけていただいたお声、嬉しいときのお顔などが思い出されます。日仏の整形外科の交流を続けていこうと陰になり日向になって努力されていたのを思い出しますと、この日仏整形外科学会をより立てていくのがせめてもの恩返しになろうかと思い、この会の発展のためにさらに努力していかなければと心新たにいたしました。

ORTHOPEDIE-TRAUMATOLOGIE *Adulte et Infantile*

Professeur J.P. CLARAC
Ancien Chef de Service au C H U de Poitiers
Ancien Expert Près La Cour d'Appel

e-mail : clarac_jp@hotmail.com
Tel : 06 03 47 17 78

9 rue Walter Poupot

33000 BORDEAUX

Tel. : 05 56 96 06 22
Fax : 0556.98.41.54

Hommage à CHARLES PICAULT le 26 novembre 2004 Abbaye d'Ainay

Je ne vous raconterai pas l'ami qui vient d'être si bien décrit.
Je vous dirai quelques mots de son immense vie professionnelle .

Dans les années 50, nous devions pour être Chirurgien, passer par un des grands Internats de France : pour Charles, ce fut Lyon, de grand prestige.

Cela supposait de bien connaître l'Anatomie qu'il n'oublia jamais (il fut même Prosecteur nommé à un autre très difficile concours) et une connaissance très large de la Médecine testée par l'écrit et un oral redoutables, bon entraînement à l'art de la communication simple et efficace...qu'il pratiquait si bien.

L'Orthopédie de l'époque était peu chirurgicale face aux luxations congénitales de hanche des enfants, aux scolioses et autres arthroses.

En 1971, j'ai créé à Poitiers l'Orthopédie du tout jeune C.H.U. et je vins à Lyon travailler le traitement des scolioses avec Claude Régis Michel (Crac).

Il ne fallut pas longtemps pour connaître un de ses grands amis, Charles Picault installé dans son cher Saint Etienne depuis quelques années : on a tous fini même par se retrouver un soir dans le « Chaudron des Verts » et...chez Charles et Julie.

Crac voyageait et , un jour, revint des U.S.A. avec la tige de Harrington le Texan qui permettait de redresser les colonnes vertébrales : nous allions tous l'adopter : une révolution ! Une révolution qui allait nous réunir tous au Groupe d'Etude des Scolioses (G.E.S.) animé par Charles, Crac et bien d'autres ...avec un détour rugbystique chaleureux à Toulouse chez Christian Salanova.

Que de publications internationales et nationales avec Charles qui fut un des rares français membre de la prestigieuse et fermée S.R.S.américaine (Scoliosis Reserch Society).

On peut voir là son goût pour la recherche et la précision : il continuait à travailler sur les corsets étudiés aussi au G.E.S.: entre autres le « trois points » de Crac qu'il humanisa pour les jeunes filles en une version souple élastique invisible : inoubliable, cette réunion du G.E.S. où, debout sur l'estrade, Charles se déshabilla pour montrer sur lui ce corset qui ...existe toujours !

A l'analyse des résultats, il vit plus vite que beaucoup la nécessité de faire mieux et travailla les abords antérieurs de la colonne. Passer par l'abdomen et le thorax ne posait pas de problèmes pour un anatomiste comme lui et il est l'auteur d'une des plus belles séries mondiales d'abords antérieurs pour scolioses.

Tout ceci lui ouvrit naturellement en 1978 la succession prestigieuse de Pierre Stagnara au Centre des Massues de Lyon , mondialement connu.

Mais il n'oubliait pas les hanches !

Son énorme expérience, sa réflexion firent qu'il fut choisi, lui l'Orthopédiste « Adulte » pour faire , à l'orée de notre 21^{ème} siècle, une Conférence d'Enseignement au très important Congrès annuel international de notre S.O.F.C.O.T. (Société Française de Chirurgie Orthopédique et Traumatologique) sur la Luxation Congénitale de Hanche : c'est un chef d'œuvre qui va rester longtemps une référence : il y montre bien qu'il n'y a pas de frontière entre enfant et adulte ; la vraie spécialisation est celle par appareil. La hanche, comme le reste doit être connue par l'Orthopédiste Infantile et Adulte, n'est ce pas, Charles !

Dans les « sixties », comme le « Harrington » pour le rachis au Texas celui qui allait devenir Sir John Charnley en Angleterre mit au point la « Low Friction Arthroplasty » : une coupelle en « plastique » dans laquelle tourne une bille de 22 mm de diamètre (donc faible frottement) juchée sur une tige plantée dans le fémur, le tout fixé par une pâte nommée ciment : cette prothèse reste de nos jours le « Gold Standard » de cette Chirurgie.

A Poitiers, moi même mais, encore plus à Saint Etienne, à Lyon et en bien d'autres villes, nous avons opéré des centaines de malades et étudié nos résultats.

Charles, énorme opérateur, fin analyste et critique fut très souvent le fédérateur qui groupe les résultats et les hommes.

Bilan : participation à de multiples réunions ou organisations dont les très célèbres Journées de la Hanche de Lyon, de précieux livres de congrès. Je ne peux nommer tout le monde...jusqu'aux organisateurs des futures (dans quelques jours) Journées « Charnley » pour lesquelles il a travaillé jusqu'à ces derniers jours...avec Frédéric qui présentera son travail.

Nous sommes nombreux à avoir publié sur ce sujet mais personne ne peut oublier l'article symbole dans la Revue de Chirurgie Orthopédique de 1980 numéro 66 : « Picault, Michel, Vidil : Prothèses Totales de Hanche de Charnley : 4300 cas opérés » Oui : 4300 ! !...avec dans la foulée la superbe thèse de Doctorat de sa fille Marie Suzel sur ce sujet....

Oui ! c'est une sorte de miracle, avec plus de 90% de bons ou très bons résultats. Mais quid des autres qui ont de l'usure, du jeu dans l'os etc... une grosse perte de capital osseux ?

Charles a tout étudié sur le sujet, opéré des chiens pour étudier la réparation osseuse d'un fémur ouvert et refermé sur une prothèse : un superbe travail expérimental .

Cette orientation vers les hanches fit que Charles quitta le Centre des Massues pour aller opérer Clinique Saint...Charles (ça ne s'invente pas !) avec un grand bonheur professionnel jusqu'à une retraite...très active et des travaux sur ces reprises de prothèses.

Il a publié maintes et maintes fois cette expérience considérable puis écrit avec Pierre Vivès un livre merveilleux très bien préfacé par le célèbre Maurice Müller: « Voie d'abord transfémorale et tige à verrouillage distal dans les échecs fémoraux des prothèses totales de hanche » (1999).

Notre complicité déjà très forte pour beaucoup de choses a augmenté d'un cran : Charles a fortement aidé une de mes Internes, Alice Fassier, pour sa Thèse (primée par la Société d'Orthopédie de l'Ouest et très demandée) sur ce même sujet, à partir des nombreux cas que j'avais opéré, parfois avec lui. Il est allé de bloc en bloc, de Service en Service expliquer ; montrer, rendre pratique une méthode qui faisait peur à beaucoup : ouvrir complètement le fémur pour l'obliger à refaire de l'os.

Japon, U.S.A., Royaume uni, Belgique, Italie, France....toujours complice de Crac y compris pour la Présidence du Congrès de la S.O.F.C.O.T. : Crac Michel la S.O.F.C.O.T., Charles le Congrès, celui là et bien d'autres...Beaucoup de communications et de contacts en particulier au Japon où il était écouté, apprécié et ...attendu à travers sa chère A.F.J.O. (Association Franco Japonaise d'Orthopédie) à laquelle il a tant donné et l'Association Japonaise dont il était membre.

Ces derniers temps, il pensait aussi beaucoup à ses petites filles tant aimées et au monde qui sera le leur avec inquiétude: structures européennes, avenir de la Médecine, des pratiques médicales et donc de la Chirurgie articulaire et du Registre des Prothèses...

Je dois aussi vous conter la dernière fois où il vint, il y a...hier en fait ! à Poitiers dans mon Service avec le Docteur Tanaka de Kyoto (Japon) pour une belle séance opératoire sur un de ces fémurs détruits par une prothèse baladeuse. Nous avons fait une dissociation des muscles avec la raspatoire , sorte de spatule simplissime réhabilitée par Charles, ce qui suppose une bonne connaissance anatomique, et utilisé son instrument spécial pour longueur et rotation : un réglal de simplicité, de rapidité sans précipitation : actuellement, la malade marche très bien avec son os reconstruit.

A la sortie du bloc, Charles prit une photo amusante de votre serviteur nettoyant sa chaussure de bloc pour l'inclure dans un magnétique montage diapo chargé d'humour et d'amitié qu'il a présentée lors de la grande fête de mon départ à la retraite : un triomphe ! La quasi totalité de mon Service et plein d'amis avaient colonisé le Club Med de Pompadour, près de Brive!. Il était venu tout exprès de Bruxelles à la fin d'une session fatigante en une dizaine d'heures, puis autant pour retrouver les siens et les siennes à Sainte Foy ! Quel témoignage inoubliable! Quelle fidélité !

Charles, nous ne t'oublierons pas !

Les chirurgiens non plus surtout s'ils suivent les voies que tu as tracées.

Les malades, encore moins ! Ni ceux que tu as opérés, ni ceux qui bénéficient de tes méthodes.

Tu peux reposer en Paix.

あなたも フランス研修に！

日仏整形外科学会では、フランス整形外科学会（SOFECOT）との間で青年整形外科医の交換研修を行っております。来年度の研修条件、応募条件等は次頁のとおりですのでお申し込み下さい。

本交換研修プログラムの趣旨は、フランスとのコネクションを持たない青年医師に留学先を紹介し、渡航費用と滞在費の一部を援助するというものです。したがって、一度フランス留学を経験しておられる先生は応募を御遠慮下さい。

日本側・フランス側役員を紹介します

日本側役員

名誉会長	七川 歓次
会 長	小野村敏信
副会長	小林 晶
書記長	瀬本 喜啓
書 記	大橋 弘嗣
	弓削 至
	青木 清
	藤原 憲太
日本側公式連絡員	ジラン敬子

フランス側役員

Président	Philippe MERLOZ
Vice Président	Dominique GAZIELLY
Affaires générales	Jean Pierre COURPIED
Secrétaire Général	Olivier RAY
Trésorier	Philippe WICART
Secrétaire Adjoint	DURANDEAU
Members du bureau	Jacques CATON

募 集 要 項

1) 募集人員	若干名(平成18年度)
2) 研修条件	1. 滞在期間は3か月間を原則とする。 この間はヴィザが不要であるが、これを越して滞在する場合の延長に関するすべての手続き(語学学校入学手続きやヴィザ発給のための受け入れ承諾書の依頼等)は自分ですること。 1か月単位であれば複数の施設での研修も可能である。 2. フランスでの滞在施設は、希望する研修分野等に応じてフランス側の担当委員が最も適当と思われる施設を推薦する。ただし応募者が特定施設を希望するときは申し出ることができる。 <u>研修期間中の家族の同伴は原則として認められない。</u> (注意:本制度は大学の若手医師アンテルヌが病院に寝とまりしている部屋に泊まることを原則としている。滞在費用を自己負担する場合はこの限りではないが、家族への宿舍斡旋等に関して過去にさまざまなトラブルがあったため、学会として援助や斡旋は一切行わない。 特にパリにおいてはアパートの契約等に関してのトラブルが多く、貴重な滞在期間の多くを宿舍探しに費やすこともあるので、フランスに知人等がいない場合は単身のほうが望ましい) 3. 費用について a) 渡航費用の一部を日仏整形外科学会が援助する。 b) フランス滞在中の本人の宿泊費はフランス側が負担する。 <u>ただし家族を同伴する場合は、宿泊費や食費等のすべての滞在費は自己負担とする。</u> c) 食費およびフランス国内での移動の費用は原則として応募者の負担とする。 4. 帰国後、仏語(英語でも可)と日本語での報告書の提出ならびに本会の総会での帰朝報告を行う。 5. 本年度の研修開始時期は4月以降とする。
3) 応募条件	1. 応募者は日仏整形外科学会会員であること。 2. 応募者は日本整形外科学会認定医であること。 3. 原則として40才を応募年令の上限とする。 4. 勤務している病院または施設の責任者の承諾のあるもの。 5. フランス語または英語を話すもの。
4) 応募に必要な書類	1. 日仏整形外科学会交換研修申請書 2. 履歴書(大学卒業以降とする) 3. 日仏整形外科学会会員2名の推薦状——推薦者は身元保証人に準ずる者と考えること。 4. 業績目録——主な発表論文5編以内(論文の別刷りは不要) 5. 渡仏承諾書 a) 大学の医局勤務者……教授の承諾書 b) 病院または施設勤務者……勤務している病院または施設の責任者の承諾書 (大学の医局人事により出張中の者は、教授の承諾書も要す。) 以上1.以外の書式は自由であるが、すべてA4サイズに統一し、上記の順にならべて左上をホチキスで綴じること。また、<u>コピー7部</u>を同封すること。 6. 連絡用住所シール(5枚)……希望する連絡場所を記入して上記の書類とともに返送すること。
5) 選考方法	1. 第1次審査は書類選考とする。書類審査の結果は平成17年7月上旬に個別に連絡する。 2. 書類選考に合格したものは平成17年7月23日(土曜日)に大阪府済生会中津病院において面接を行う予定である。面接の時間は個別に通知する。 3. 合否は平成17年8月上旬に通知する。 4. 合格者は後日改めて仏文または英文の履歴書等、フランスでの研修に必要な書類が求められる。
6) 申請締め切り	平成17年6月30日必着
7) 申し込み先	日仏整形外科学会事務局 大阪医科大学整形外科内 〒569-8686 大阪府高槻市大学町2-7 電話(072)683-1221 代表(お問い合わせは藤原まで)

日仏整形外科学会 会長 小野村 敏信



日仏整形外科学会交換研修申請書

様式2

H18-1

申請者氏名 _____ 性別 _____ 年齢 _____ 歳
仏 文 姓 _____ 名 _____
生 年 月 日 _____
住 所 〒 _____
電 話 番 号 _____
勤 務 先 名 _____
勤務先住所 〒 _____
勤務先電話番号 _____ FAX _____
研修を希望する専門領域 _____
研修を希望するフランス側の機関（病院）があればお書き下さい。

希望する滞在期間 平成18年 ____ 月 ____ 日から平成 ____ 年 ____ 月 ____ 日
(本年度は4月以降から研修開始とする)

会話可能な外国語（○印をつける）

* フランス語 * 英語 * その他 ()

家族について（○印をつける）

* 同伴する * 同伴しない

配偶者も医療関係者の方はその職種を書いてください

過去に本学会の交換研修に応募歴がある方は、何年に面接を受けたかお書き下さい。

平成 ____ 年

上記の如く日仏整形外科学会交換研修を希望し応募いたします。

平成 ____ 年 ____ 月 ____ 日

氏名 _____ 印 _____

フランス整形外科医交換研修受け入れ承諾書

様式 1

(日仏整形外科学会 交換研修プログラムによる)

フランス青年整形外科医を対象とした、交換研修プログラムの日本側受け入れを以下の条件のもとで承諾します。(すでに登録されている施設は、変更事項のある場合のみお送りください。)

受け入れ責任者 _____

受け入れ施設名 _____

住 所 _____

電話番号 (_____) _____

専門分野 _____

受け入れ条件 (該当する項目の□内にチェックして下さい)

* 受け入れ可能な期間 (原則としては3ヵ月間です)

☐ 3ヵ月間 ☐ 2ヵ月間 ☐ 2ヵ月間 ☐ 何ヵ月でもよい ☐ その他 (_____)

* 受け入れ可能な時期

☐ 月から 月まで ☐ 月を除く ☐ 常時受け入れる
☐ その他 (具体的に _____)

* 受け入れ可能な人数

☐ 年間1人 ☐ 年間2人 ☐ 年間3人以上 ☐ その他 (_____)
☐ 同一時期に1人 ☐ 同一時期に2人以内 ☐ 同一時期に3人以上
☐ その他 (_____)

* 宿泊設備について

☐ 宿泊設備を無料で利用可能
☐ 宿泊設備を有料で利用可能 (1日 _____ 円)
☐ 宿泊設備は備えていないがホテル等の宿泊費は支給する
☐ 宿泊設備は備えていない。ホテル等の宿泊費も支給しない
☐ その他 (_____)

* 食事について

☐ 施設内で食事を用意する
☐ 施設内で食事の準備はしないが食費を支給する
☐ 一部施設内で食事を用意し、一部食費を支給する
☐ その他 (_____)

* 交通費について

☐ 交通費を支給する
☐ 交通費は支給しない
☐ その他 (_____)

* その他

☐ 日本国内の学会等への参加を援助する
☐ その他 (_____)

以上の条件のもとに日仏整形外科学会の青年整形外科医の日仏交換プログラムの日本側受け入れ機関となることを承諾します。

平成 年 月 日

受入責任者 氏名

印

第8回日仏整形外科合同会議(8^{ème} Réunion de l'AFJO) 開催のご案内



2005年5月6(金)・7(土)日の両日、第8回日仏整形外科合同会議を下記のように開催いたします。
多数の先生方のご参加をお待ちしています。

記

- [1] 会議期日：2005年5月6日(金)～7日(土)
- [2] 開催場所：京都市国際交流会館 京都市左京区栗田口鳥居町2番地の1
TEL 075-752-3010 FAX 075-752-3510
- [3] 議長：瀬本 喜 啓(近江温泉病院 副院長)
- [4] 会議内容：2005年 5月6日(金)：開会式・一般演題・特別講演・懇親会
5月7日(土)：一般演題・閉会式
5月8日(日)：excursion (奈良を予定)
- [5] 使用言語：英語
- [6] 予定プログラム

		イベントホール	第1・2 会議室	
5月6日(金)	午前	開会式／一般演題	機械 展示	同伴者 プログラム
	午後	特別講演／一般演題		
	夕方	懇親会		
5月7日(土)	午前	シンポジウム「日仏両国における最小侵襲手術の現況」 一般演題		
	午後	閉会式		

特別講演 "Minimally invasive surgery and navigation system"
PRESIDENT de l'AFJO FRANCE P. Merloz (GRENOBL)

- [7] 後援機関：日本整形外科学会・フランス整形災害外科学会・日仏医学会

議長
組織委員長
組織委員会 事務局

瀬本 喜啓(近江温泉病院 副院長)
小野村敏信(大阪医科大学名誉教授)
大阪医科大学整形外科学教室内 〒569-8686 大阪府高槻市大学町2-7
TEL 072-683-1221 内線2364または2442 FAX 072-682-8003(係：藤原)
問い合わせ用E-mail address: ort003@poh.osaka-med.ac.jp(演題募集用ではありません)

1



日仏整形外科学会ボランティアグループ 「パピヨン」 に入会しませんか

——— Equipe bénévole pour la SOFJO (AFJO) ———

日仏整形外科学会の活動を支えていただくために
1996年4月に結成されました。

まず1996年4月13日・14日に東京で開催された第4
回日仏整形外科合同会議のお手伝いをするために10数
名の先生や関係の方々に登録していただき、会議の開
催に協力していただきました。

今後も日仏整形外科学会の運営をお手伝いしていただ
ける先生ならびに一般の方々にボランティアとしてご
登録いただき、可能な時間にお手伝いをお願いしたい
と思っております。

日仏整形外科学会の会員または会員1名の推薦を受け
た方なら誰でも入会できます。

日常的な簡単な英会話ができれば、フランス語は必ず
しも必要ではありません。もちろんフランス語のでき
る方は大歓迎です。シンボルマークは蝶のマークです。

Papillonに関するお問い合わせ、入会申込は日仏整形外
科学会事務局、藤原憲太まで。

2

インターネットホームページのご紹介



Welcome to So.F.J.O Homepage
ようこそ日仏整形外科学会 (SOFJO) のホームページへ

日仏整形外科学会のインターネットホームページの
アドレスは

<http://www.sofjo.gr.jp/>

です。

是非のぞいてみてください。

- ・沿革
- ・活動内容
 - 入会のご案内
- ・役員紹介
- ・共同研究
- ・交換研修
- ・日仏整形外科協議会 (AFJO)
- ・日仏整形外科学会ボランティアグループ
- ・関連リンク集
- ・SOFJOのTop Pageへ

日仏整形外科学会 会計報告・予算をお知らせします

平成15年度会計報告

歳入の部	(単位：円)
一般会員年会費（147人）	492,000
賛助会員	0
寄付（松尾先生）	100,000
広告料	675,000
預金利息	22
雑収入	0
前年度繰越金	3,603,010
計	4,870,032
歳出の部	(単位：円)
日本人交換整形外科医奨学金	600,000
フランス人交換整形外科医奨学金	0
インターネットホームページ維持管理費	358,800
コンピューター関連費	310,690
日仏整形外科学会事務局費	567,973
通信費	91,780
事務費	77,293
人件費	398,900
会議費	127,323
旅費・交通費	72,342
印刷費	770,000
雑費	0
予備費	
出金小計	2,807,128
次年度繰越金	2,062,904
計	4,870,032

平成16年度事業費予算編成

歳入の部	(単位：円)
一般会員年会費	500,000
賛助会員	1,000,000
広告料	1,000,000
預金利息	40
雑収入	5,000
前年度繰越金	2,062,904
計	4,567,944
歳出の部	(単位：円)
日本人交換整形外科医奨学金	
渡航費＋滞在費（一部）200,000×1人	400,000
フランス人交換整形外科医奨学金	
滞在費、交通費 100,000×2人×2カ月	200,000
SOFJO／AFJO開催関係費	300,000
日仏整形外科学会関連事業（表彰など）	50,000
日仏共同研究、研究助成	300,000
森崎日整形外科学用語集編纂事業	50,000
インターネットホームページ維持管理費	400,000
コンピューター関連費	200,000
事務局（通信費、事務費、人件費）	400,000
会議費	50,000
旅費・交通費	100,000
連絡員費用（ジランさん）	100,000
印刷費	800,000
予備費	50,000
次年度繰越金	1,167,944
計	4,567,944

4

これまでに 交換研修に参加された 先生方

研修年度	氏名	所属医局
1990	稲毛 昭彦	大阪医科大学
1991	三輪 隆	帝京大学
1991	末松 典明	旭川医科大学
1992	星 忠行	弘前大学
1992	村上 元庸	滋賀医科大学
1992	久保 俊一	京都府立医科大学
1993	小浦 宏	岡山大学
1994	西川 真史	弘前大学
1994	岩崎 幹季	大阪大学
1995	石澤 命仁	滋賀医科大学
1995	安永 裕司	広島大学
1996	安間 基雄	順天堂大学
1996	寺門 淳	千葉大学
1996	仁平高太郎	慶応大学
1997	益田 和明	岐阜大学
1997	金子 和生	山口大学
1998	山川 徹	三重大学
1998	岡本 雅雄	大阪医科大学
1999	清重 佳郎	山形医科大学
1999	川崎 拓	滋賀医科大学
2000	宮本 敬	岐阜大学
2000	藤井 一晃	弘前大学
2000	細野 昇	大阪大学
2001	鳥飼 英久	千葉大学
2001	久我 尚之	九州大学
2002	瀧川 直秀	大阪医科大学
2002	松峯 昭彦	三重大学
2003	柁原 俊久	昭和大学藤が丘病院
2003	矢吹 有里	慶応義塾大学
2004	和田 孝彦	関西医科大学
2004	久留 隆史	広島大学

5

これまでにフランスから 交換研修医として来られた 先生方と研修施設

研修年度	氏名	研修病院名
1991	Philippe LEVEREAUX	京都府立医科大学・広島大学
1991	Luis Michel COLLET	大阪医科大学・滋賀小児センター・ 福岡こども病院
1992	Frederic DUBRANA	福岡整形外科病院・九州大学
1992	Marc CHASSARD	慶応義塾大学・東海大学・ 札幌医科大学
1994	Philippe WICART	山口大学・金沢大学
1994	Philippe RENAUX	滋賀医科大学・岡山大学
1995	Michel NINOU	大阪医科大学・ 新潟手の外科研究所・広島大学
1997	Bernardo Vargas BARRETO	国立小児病院・岡山大学・ 国立大阪病院
1997	Sylvie MERCIER	大阪医科大学
1998	Jérôme COTTALORDA	大阪医科大学・ 福岡県立粕屋新光園
1999	Olivier CHARROIS	滋賀医科大学・京都市立病院
1999	Eric HAVET	滋賀医科大学
2001	Laurent JACQUOT	福岡整形外科病院・ 慶応義塾大学・高岡整志会病院
2001	Alexandre ROCHWERGER	大阪医科大学・山形大学
2004	Brice ILHARRBORDE	総合せき損センター・ 大阪市立大学

編集
後記

2004年11月に日仏整形外科学会(SOFJO)が神戸で開催されました。マルセイユからBollini教授に特別講演に来ていただきました。学会以外にも日本を楽しみました。学うです。その様子をお世話していただいた藤原先生から文章をいただきました。学会がメインであることは間違いないのですが、本学会では学会後の懇親会も楽しみのひとつです。今回もキャビアやフォアグラのオードブルに始まり、おいしいフランス料理と選ばれたワインが饗され、なごやかな懇親の場となりました。楽しみの多い学会ですので、これからも多くの先生方のご参加をお待ちしています。

交換研修帰朝報告は和田先生から、また留学中の柁原先生からも留学奮闘記をいただきました。

たいへん悲しいお知らせになりましたが、この日仏整形外科学会の設立に当初からご尽力してくださいましたピコー先生がお亡くなりになりました。役員の先生方からピコー先生を偲ぶ文章をいただきました。この学会の発展を願っておられたので、そのご遺志を受け継ぐべく努力していきたいと思いますので、皆様のご協力もよろしくお願いいたします。

2005年5月には京都で第8回日仏整形外科合同会議(AFJO)が開催されます。今回もフランスから大勢の先生方が来られます。懇親会は栗田御所と呼ばれ天台宗の格式高い門跡寺院である青蓮院で行われる予定です。

では、京都でお会いできますよう楽しみにしています。

A bientôt !

(係 大橋弘嗣)



NEW L'ESPACE PREMIERE エールフランスの新しいファーストクラス

革と木目のインテリア、50%も広いパーソナルスペース、わずか8席の本格的ベッド、美食を究めたフレンチメニュー、そしておひとりずつに心のこもったサービス。

www.airfrance.co.jp



AIR FRANCE
あなたの最高の空へ。エールフランス



JMM JAPAN
MEDICAL
MATERIALS

A Kyocera and Kobe Steel joint company

KYOCERA / KOBELCO

Kyocera PerFix

Total Hip System

910 Series

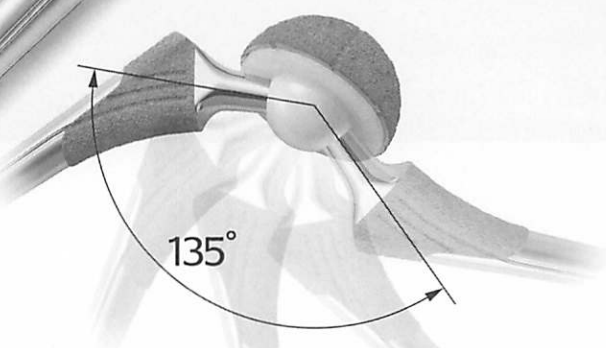
nine-ten



Wide Mobility

広いステム可動域

Kyocera PerFix 910 Seriesのデザイン上の可動域は、骨頭径28mmの+3mmボール使用時において135度になっています。その可動域により、カップとステムネック間におけるインピンジメントの発生及び脱臼のリスクを低減させることが期待できます。



910 Kyocera PerFix HAカラーレス/カラードステム [医療用具承認番号: 20700BZZ00357000]

910 Kyocera PerFix Cステム [医療用具承認番号: 21500BZZ00010000]

セントライザー/ボーンプラグ [医療用具承認番号: 20800BZZ00612000]

日本メディカルマテリアル株式会社

大阪市淀川区宮原3丁目3-31 (上村ニッセイビル9F) 〒532-0003 Tel: 06-6350-1036 Fax: 06-6350-5736

札幌営業所 札幌市中央区北一条西3丁目3 (北一条西3丁目3ビル3F) 〒060-0001
Tel: 011-260-6020 Fax: 011-261-6525
東北営業所 仙台市青葉区大町2丁目2-10 (住友生命仙台青葉通ビル6F) 〒980-0804
Tel: 022-216-5176 Fax: 022-216-7116
大宮営業所 さいたま市大宮区桜木町2丁目287 (大宮西口大栄ビル4F) 〒330-0854
Tel: 048-640-7779 Fax: 048-641-5628
東京営業所 東京都港区新橋2丁目4-1 (新橋ニッセイビル10F) 〒163-0810
Tel: 03-5339-3645 Fax: 03-3343-3097

名古屋営業所 名古屋市中区東3丁目15-31 (住友生命千種ニュータワービル9F) 〒461-0004
Tel: 052-920-1481 Fax: 052-928-1377
京都営業所 京都市下京区西院通堀小堀上ル東山小路町608-9 (日本生命京都三越ビル3F) 〒600-8216
Tel: 075-353-4322 Fax: 075-343-3118
大阪営業所 大阪市淀川区宮原3丁目3-31 (上村ニッセイビル8F) 〒532-0003
Tel: 06-6350-1017 Fax: 06-6350-8157

岡山営業所 岡山市東区10-16 (ニッセイ岡山南側岡山ビル4F) 〒700-0826
Tel: 086-803-3620 Fax: 086-225-2289
広島営業所 広島市中区横町13-11 (明治安田生命広島横町ビル9F) 〒730-0016
Tel: 082-212-1003 Fax: 082-211-3008
九州営業所 福岡市博多区博多駅前2丁目10-35 (11博多ビル7F) 〒812-0013
Tel: 092-452-8140 Fax: 092-452-8177

<http://www.jmmc.jp/>

貼るボルタレン



新発売

【禁忌(次の患者には使用しないこと)】

1. 本剤の成分に対し過敏症の既往歴のある患者
2. アスピリン喘息(非ステロイド性消炎鎮痛剤等により誘発される喘息発作)又はその既往歴のある患者[重症喘息発作を誘発するおそれがある。]

【効能又は効果】

下記疾患並びに症状の鎮痛・消炎

変形性関節症、肩関節周囲炎、腱・腱鞘炎、腱周囲炎、上腕骨上顆炎(テニス肘等)、筋肉痛(筋・筋膜性腰痛症等)、外傷後の腫脹・疼痛

【用法及び用量】

1日1回患部に貼付する。

【使用上の注意】

1. 慎重投与(次の患者には慎重に使用すること)

気管支喘息のある患者[気管支喘息患者の中にはアスピリン喘息患者も含まれており、それらの患者では重症喘息発作を誘発するおそれがある。]

2. 重要な基本的注意

- (1) 消炎鎮痛剤による治療は原因療法ではなく対症療法であることに留意すること。
- (2) 皮膚の感染症を不顕性化するおそれがあるので、感染を伴う炎症に対して用いる場合には適切な抗菌剤又は抗真菌剤を併用し、観察を十分行い慎重に使用すること。
- (3) 慢性疾患(変形性関節症等)に対し、本剤を用いる場合には薬物療法以外の療法も考慮すること。また患者の状態を十分観察し、副作用の発現に留意すること。

3. 相互作用

併用注意(併用に注意すること)

ニューキノロン系抗菌剤工ノキサシン等(痙攣を起こすおそれがある。痙攣が発現した場合には、気道を確保し、ジアゼパムの静注等を行う。)

4. 副作用

本剤は、副作用発現頻度が明確となる臨床試験を実施していない。なお、1%ジクロフェナクナトリウム軟膏において承認時までに報告された副作用は、総症例1,062例中41例(3.9%)、53件であった。その主な症状は、皮膚炎(発疹、湿疹、皮疹、かぶれ)27件(2.5%)、そう痒感9件(0.8%)、発赤8件(0.8%)、皮膚のあれ4件(0.4%)、刺激感3件(0.3%)等であった。(1%ジクロフェナクナトリウム軟膏承認時までのデータ)

	頻度不明	0.1%~5%未満	0.1%未満
皮膚 ^{注)}	光線過敏症	皮膚炎、そう痒感、発赤、皮膚のあれ、刺激感	水疱、色素沈着

注)このような症状があらわれた場合には、使用を中止する等適切な処置を行うこと。

- その他の使用上の注意については、製品添付文書をご覧ください。

経皮鎮痛消炎剤

【薬価基準収載】

ボルタレン[®]テープ
指定医薬品
Voltaren[®] Tape ジクロフェナクナトリウムテープ

販売

(資料請求先)

NOVARTIS DIRECT

ノバルティス ファーマ株式会社

0120-003-293

〒106-8618 東京都港区西麻布 4-17-30

受付時間: 月~金 9:00~18:00

製造: 同仁医薬化工株式会社

www.voltaren.jp

腰痛症や 変形性関節症等へ 一日、一回。

慢性
疼痛性疾患に
有効です。

- ケトプロフェンの経皮吸収性、組織への浸透性が高く、局所濃度を持続的に維持できます。
- 副作用発現率は4.93% (57例/1,156例) で主に痒疹感、発疹、発赤などの接触皮膚炎でした。(モーラステープ承認時)
- 重大な副作用として、アナフィラキシー様症状、喘息発作の誘発(アスピリン喘息)、接触皮膚炎、光線過敏症が報告されています。
- 伸縮性・柔軟性・粘着性に優れ、使用感が良好です。

【禁忌】(次の患者には使用しないこと)

- (1) 本剤又は本剤の成分に対して過敏症の既往歴のある患者
(「重要な基本的注意」の項(1)参照)
- (2) アスピリン喘息(非ステロイド性消炎鎮痛剤等による喘息発作の誘発)又はその既往歴のある患者[喘息発作を誘発するおそれがある。]
- (3) チアプロフェン酸、スプロフェン、フェノフィブラート及びオキシベンゾンに対して過敏症の既往歴のある患者[ケトプロフェンと交叉感作性を有することが知られており、本剤の使用によって過敏症を誘発するおそれがある。]

【効能・効果】

下記疾患の慢性症状(血行障害、筋痙攣、筋拘縮)を伴う場合の鎮痛・消炎
腰痛症(筋・筋膜性腰痛症、変形性脊椎症、椎間板症、腰椎捻挫)、変形性関節症、
肩関節周囲炎、腱・腱鞘炎、腱周囲炎、上腕骨上顎炎(テニス肘等)

【効能・効果に関連する使用上の注意】

- (1) 局所熱感、腫脹等を伴う急性期には有効性が確認されていないので使用しないこと。
- (2) 本剤の使用により重篤な接触皮膚炎、光線過敏症が発現することがあり、中には重度の全身性発疹に進展する例が報告されているので、疾病の治療上の必要性を十分に検討の上、治療上の有益性が危険性を上まわる場合にのみ使用すること。

【用法・用量】

1日1回患部に貼付する。

【使用上の注意】

1. 慎重投与(次の患者には慎重に使用すること)
気管支喘息のある患者[アスピリン喘息患者が潜在しているおそれがある。]
(「重大な副作用」の項(2)参照)
2. 重要な基本的注意
(1) 本剤又は本剤の成分により過敏症(紅斑、発疹・発赤、腫脹、刺激感、痒疹等を含む)を発現したことがある患者には使用しないこと。
(2) 接触皮膚炎又は光線過敏症を発現することがあり、中には重度の全身性発疹に至った症例も報告されているので、使用前に患者に対し次の指導を十分に行うこと。(「重大な副作用」の項(3)(4)参照)
1) 紫外線曝露の有無にかかわらず、接触皮膚炎を発現することがあるので、発疹・発赤、痒疹感、刺激感等の皮膚症状が認められた場合には、直ちに使用を中止し、患部を遮光し、受診すること。なお、使用後数日を経過して発現する場合があるため、同様に注意すること。
2) 光線過敏症を発現することがあるので、使用中は天候にかかわらず、戸外の活動を避けるとともに、日常の外出時も、本剤貼付部を衣服、サポーター等で遮光すること。なお、白い生地や薄手の服は紫外線を透過するおそれがあるので、紫外線を透過させにくい色の衣服などを着用すること。また、使用後数日から数カ月を経過して発現することもあるため、使用後も当分の間、同様に注意すること。
(3) 消炎鎮痛剤による治療は原因療法ではなく、対症療法であることに留意すること。
(4) 皮膚の感染症を不顕性化するおそれがあるので、感染を伴う炎症に対して用いる場合には適切な抗菌剤又は抗真菌剤を併用し、観察を十分に行い、慎重に投与すること。
(5) 本剤による治療は対症療法であるので、症状に応じて薬物療法以外の療法も考慮すること。また、投与が長期にわたる場合には患者の状態を十分に観察し、副作用の発現に留意すること。

経皮鎮痛消炎剤

薬価基準収載

指定医薬品

モーラステープ®

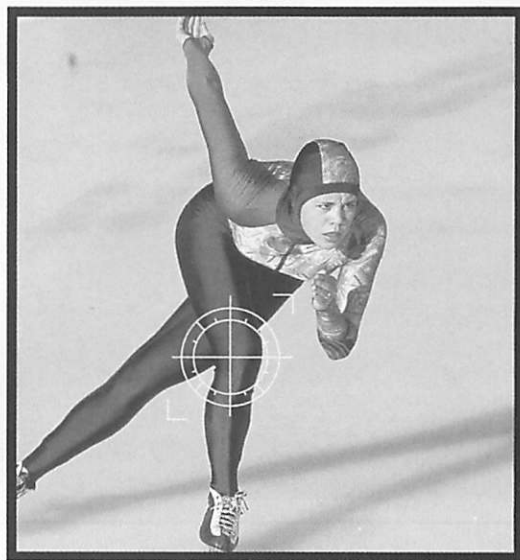
<ユートク>

指定医薬品

モーラステープL®

<ユートク>

【ケトプロフェン2%】



3. 相互作用

【併用注意】(併用に注意すること)

薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子
メトレキサート	ケトプロフェン経口剤とメトレキサートの併用によりメトレキサートの作用が増強されることがある。	ケトプロフェンとメトレキサートを併用した場合、メトレキサートの腎排泄が阻害されることが報告されている。

4. 副作用

総症例1,156例中副作用が報告されたのは57例(4.93%)であり、発現した副作用は、発疹11件、発赤9件、痒疹感18件、刺激感5件等の接触皮膚炎54件(4.67%)、貼付部の膨疹、動悸、顔面及び手の浮腫各1件(0.09%)などであった。(モーラステープ承認時)
ほかに医師などの自発的報告により、アナフィラキシー様症状、喘息発作の誘発(アスピリン喘息)、光線過敏症の発現が報告されている。

(1) 重大な副作用

- 1) アナフィラキシー様症状(0.1%未満)
アナフィラキシー様症状(蕁麻疹、呼吸困難、顔面浮腫等)があらわれることがあるので、このような症状があらわれた場合には使用を中止すること。
- 2) 喘息発作の誘発(アスピリン喘息)(0.1%未満)
喘息発作を誘発することがあるので、乾性う音、喘鳴、呼吸困難等の初期症状が発現した場合は使用を中止すること。気管支喘息患者の中には約10%のアスピリン喘息患者が潜在していると考えられているので留意すること。なお、本剤による喘息発作の誘発は、貼付後数時間で見られている。(「禁忌」の項(2)参照)
- 3) 接触皮膚炎(5%未満、重篤例は頻度不明)
本剤貼付部に発現した痒疹感、刺激感、紅斑、発疹・発赤等が悪化し、腫脹、浮腫、水疱・びらん等の重度の皮膚炎症状や色素沈着、色素脱失が発現し、さらに全身に皮膚炎症状が拡大し重篤化することがあるので、異常が認められた場合には直ちに使用を中止し、患部を遮光し、適切な処置を行うこと。なお、使用後数日を経過してから発現することもある。
- 4) 光線過敏症(頻度不明)
本剤の貼付部を紫外線に曝露することにより、強い痒疹を伴う紅斑、発疹、刺激感、腫脹、浮腫、水疱・びらん等の重度の皮膚炎症状や色素沈着、色素脱失が発現し、さらに全身に皮膚炎症状が拡大し重篤化することがあるので、異常が認められた場合には直ちに使用を中止し、患部を遮光し、適切な処置を行うこと。なお、使用後数日から数カ月を経過してから発現することもある。

(2) その他の副作用

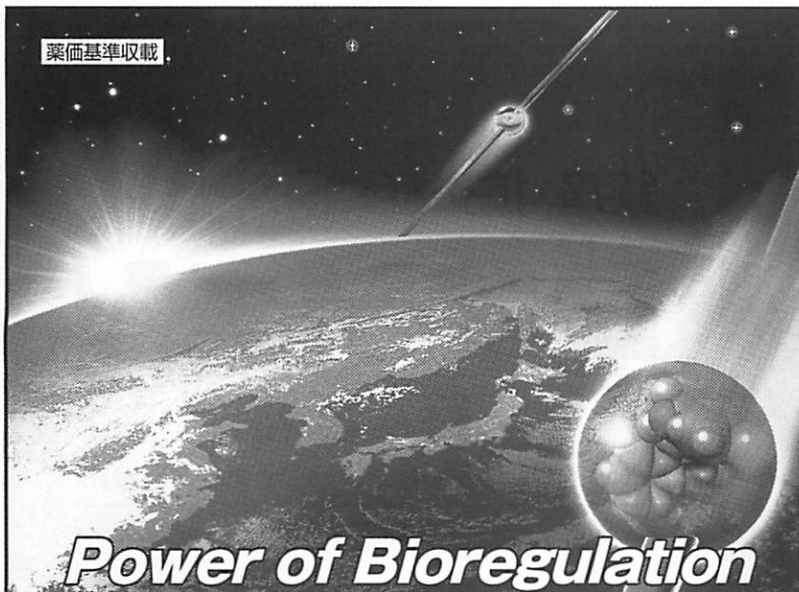
分類	頻度	0.1~5%未満	0.1%未満
皮膚 ^(注)	局所の発疹、発赤、腫脹、痒疹感、刺激感、水疱・びらん、色素沈着等		皮下出血

注)このような症状があらわれた場合は直ちに使用を中止すること。

※その他の使用上の注意については添付文書をご参照ください。

資料請求先 祐徳薬品工業株式会社 学術グループ
佐賀県鹿島市大字納富分2596番地1

薬価基準収載



Power of Bioregulation

胃炎・胃潰瘍治療剤

指定医薬品

ムコスタ[®] 錠100 顆粒20%
Mucosta[®] レバミピド製剤



製造発売元
大塚製薬株式会社
東京都千代田区神田司町2-9

資料請求先
大塚製薬株式会社 学術部
〒101-8535 東京都千代田区神田司町2-2
大塚製薬 神田第2ビル

〔禁忌(次の患者には投与しないこと)〕
本剤の成分に対し過敏症の既往歴のある患者

〔効能・効果〕及び〔用法・用量〕

〔効能・効果〕	〔用法・用量〕
胃潰瘍	通常、成人には1回レバミピドとして100mg(ムコスタ錠100:1錠、ムコスタ顆粒20%:0.5g)を1日3回、朝、夕及び就寝前に経口投与する。
下記疾患の胃粘膜病変(びらん、出血、発赤、浮腫)の改善 急性胃炎、慢性胃炎の急性増悪期	通常、成人には1回レバミピドとして100mg(ムコスタ錠100:1錠、ムコスタ顆粒20%:0.5g)を1日3回経口投与する。

〔使用上の注意〕一抜粋—

副作用

調査症例10,047例中54例(0.54%)に臨床検査値の異常を含む副作用が認められている。このうち65歳以上の高齢者3,035例では18例(0.59%)に副作用がみられた。副作用発現率、副作用の種類においても高齢者と非高齢者で差は認められなかった。(ムコスタ錠100の承認時及び再審査終了時)

以下の副作用には別途市販後に報告された自発報告を含む。

重大な副作用

1. ショック、アナフィラキシー様症状(頻度不明*)：ショック、アナフィラキシー様症状があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。
2. 白血球減少(0.1%未満)、血小板減少(頻度不明*)：白血球減少、血小板減少があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。
3. 肝機能障害(0.1%未満)、黄疸(頻度不明*)：AST(GOT)、ALT(GPT)、γ-GTP、ALPの上昇等を伴う肝機能障害、黄疸があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。

*：自発報告において認められた副作用のため頻度不明。

◇その他の使用上の注意等は、製品添付文書をご参照ください。

(‘04.07作成)

経口プロスタグランジンE₁誘導体制剤

薬価基準収載

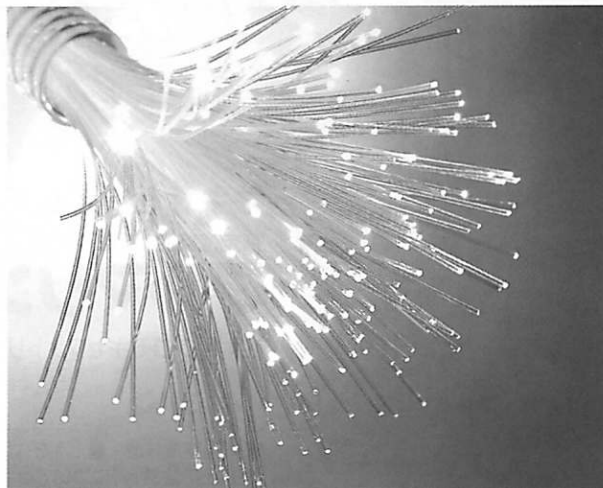
指定医薬品
要指示医薬品^(注)

オパールモン[®]

リマプロスト アルファデクス錠

OPALMON[®]

(注) 注意—医師等の処方せん・指示により使用すること。



●効能・効果、用法・用量、禁忌を含む使用上の注意等、
詳細は製品添付文書をご参照ください。

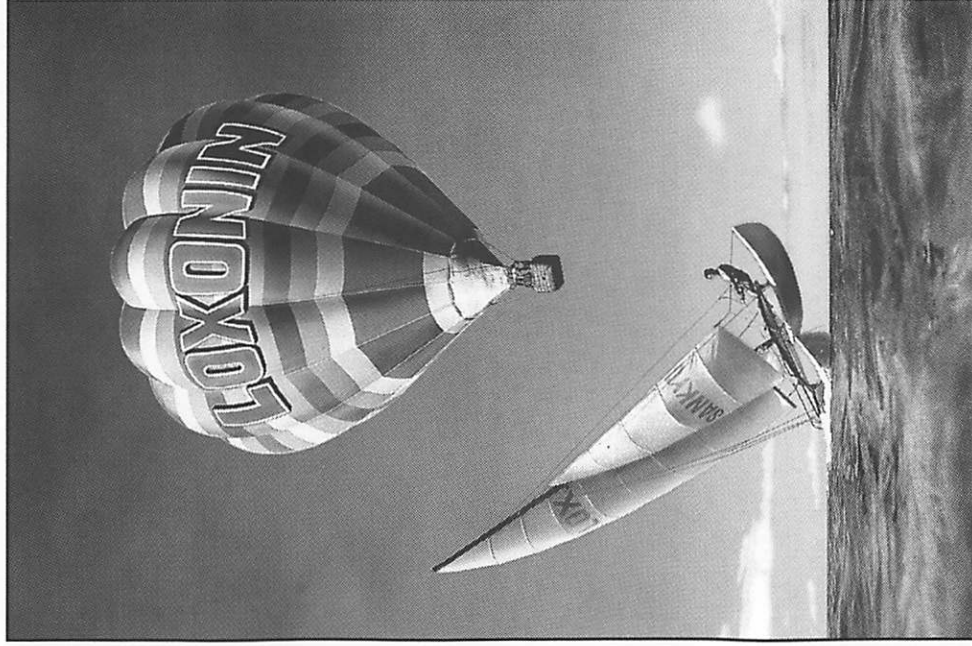


資料請求先

小野薬品工業株式会社

〒541-8564 大阪市中央区久太郎町1丁目8番2号

031101



鎮痛・抗炎症・解熱剤

ロキソニン®

錠 / 細粒

劇薬・指定医薬品 一般名:ロキソプロフェンナトリウム

■薬価基準収載

効能・効果、用法・用量、及び禁忌を含む
使用上の注意等は添付文書をご覧ください。



製造販売元(資料請求先)

三共株式会社

SANKYO 〒103-8426 東京都中央区日本橋本町3-5-1

04.12(七)



フルマリン® キット静注用1g

オキサセフェム系抗生物質製剤

指定医薬品, 要指示医薬品^{注1)}

フルマリン®キット静注用1g

注射用フロモセフナトリウム 略号 FMOX Flumarin®

^{注1)} 注意—医師等の処方せん・指示により使用すること

■薬価基準収載 ■「効能 効果」、「用法・用量」、「禁忌」、「原則禁忌」、
「使用上の注意」等については添付文書をご参照下さい。 ⑧:登録商標

(資料請求先) 塩野義製薬株式会社 〒541-0045 大阪市中央区道修町3-1-8

 **シオノギ製薬**

2004.6.A42

ボーンセラム® BONECERAM

水酸アパタイト骨補填材料

ボーンセラム® P

医療用具承認番号162008ZZ01201

水酸アパタイト人工骨材料

ボーンセラム® K

医療用具承認番号206008ZZ00403

ボーンセラム® P

ボーンセラムPは、バイオフィUNCTIONALな機能設計に基づいて製造された多孔質ハイドロキシアパタイトです。

■特長

1. 骨動態学的特性を有しています。
2. 生体適合性が優れています。
3. 加工性に優れ、取扱が容易です。
4. 真球状の気孔構造を有し、機械的強度が優れています。
5. 臨床的有用性が認められています。

■性能、使用目的、効能又は効果

骨又は関節手術における骨補填

ボーンセラム® K

ボーンセラムKは、生体適合性に優れているボーンセラムPと同成分を有する緻密質ハイドロキシアパタイトです。

■特長

1. 機械的強度がボーンセラムPより優れています。
2. 骨組織と直接結合します。

■性能、使用目的、効能又は効果

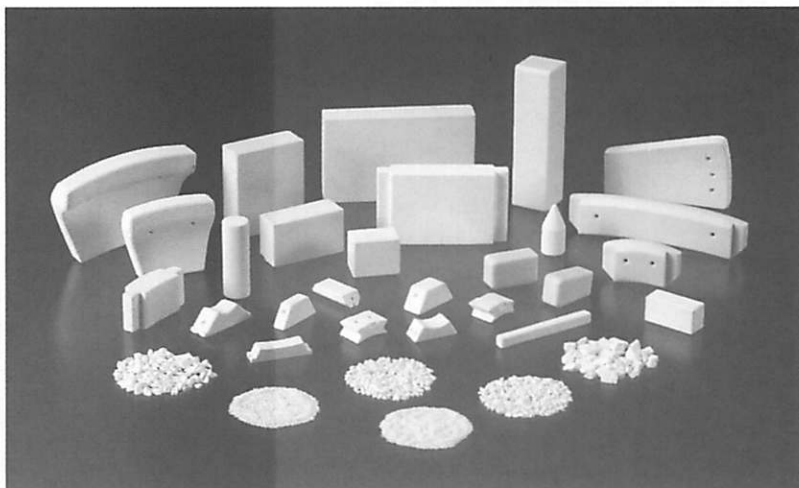
骨又は関節手術における骨修復、骨補填又は骨充填

製造元

住友大阪セメント株式会社
東京都千代田区六番町6番地28

販売元

住友製薬株式会社
大阪市中央区道修町2丁目2番8号



連絡先

住友製薬株式会社
医療材料部

大阪市中央区道修町2丁目2番8号

TEL (06) 6229-5649 FAX (06) 6233-2844

東京都中央区京橋1丁目12番2号

TEL (03) 5159-2538 FAX (03) 5159-1980



カルバペネム系抗生物質製剤

薬価基準収載

指定医薬品・要指示医薬品（注意—医師等の処方せん—指示により使用すること）

メロペン® 点滴用 0.25g・0.5g
0.5g(キット)

Meropen® 注射用メロペネム 略号：MEPM

■効能・効果、用法・用量、使用上の注意等につきましては添付文書をご参照ください。

製造発売元（資料請求先）

住友製薬株式会社

〒541-8510 大阪市中央区道修町2丁目2番8号

＜製品に関するお問い合わせ先＞

くすり情報センター

0120-03-4389

受付時間／月～金 9:00～17:30（祝・祭日を除く）
<http://e-medicine.sumitomopharm.co.jp>



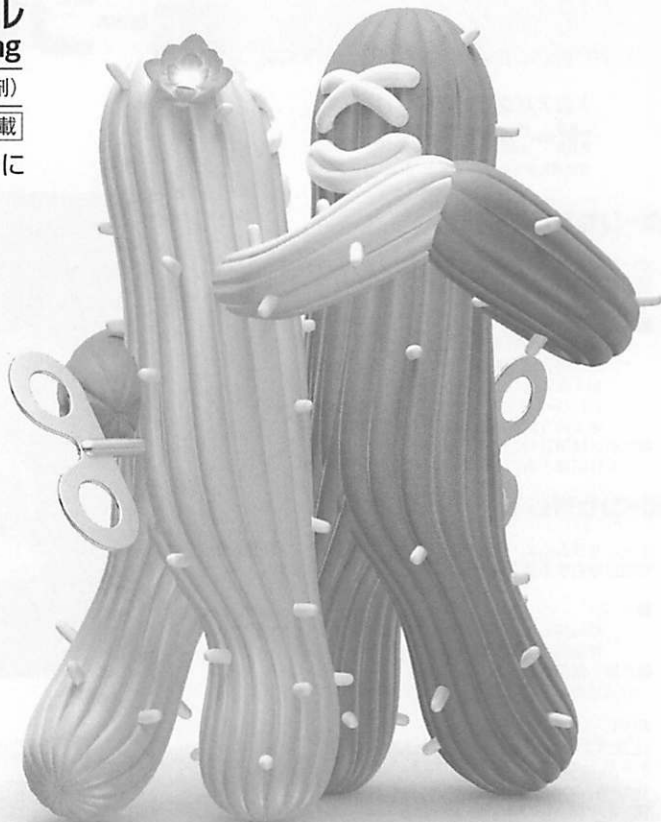
非ステロイド性消炎・鎮痛剤 劇薬、指定医薬品

モービック®カプセル
5mg・10mg

Mobic® Capsules 5mg・10mg (メロキシカム製剤)

薬価基準収載

※効能・効果、用法・用量、禁忌を含む使用上の注意等については添付文書等をご覧ください。



発売元



第一製薬株式会社

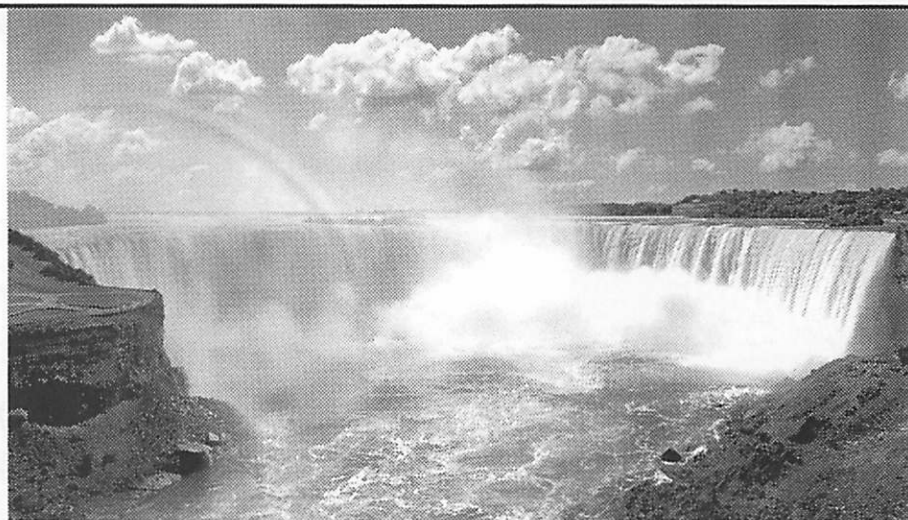
資料請求先
〒103-8234 東京都中央区日本橋三丁目14番10号
ホームページアドレス
<http://www.daiichipharm.co.jp/>



Boehringer
Ingelheim

製造元

日本ベーリンガーインゲルハイム株式会社
〒666-0193 兵庫県川西市矢間3-10-1



注射用セフェム系抗生物質製剤

略号: **CTM**

指定医薬品、要指示医薬品 (注意-医師等の処方せん・指示により使用すること)

パンスポリン®

(注射用塩酸セフトリアム)

静注用0.25g・0.5g・1g・1g(キット品)

静注用1gバッグS・1gバッグG

筋注用0.25g

■効能・効果、用法・用量、禁忌・使用上の注意等については、添付文書をご参照ください。■薬価基準:収載

PANSPORIN®

(資料請求先)



武田薬品工業株式会社

〒540-8545 大阪市中央区道修町四丁目1番1号
<http://www.takeda.co.jp/>

(0404 A42)D

おおって守って、直接なおす。



効能・効果

・胃潰瘍
・下記疾患の胃粘膜病変（びらん、出血、発赤、浮腫）の改善
急性胃炎、慢性胃炎の急性増悪期

用法・用量

通常、成人には本剤を1回1.5g（エカベトナトリウムとして1g）、1日2回（朝食後、就寝前）経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。

使用上の注意

1.副作用

臨床試験（治験）：総症例729例中、副作用が報告されたのは6例（0.82%）で、副作用は発疹、蕁麻疹、便秘、下痢、胸部圧迫感、全身倦怠感各1件（0.14%）であった。

使用成績調査（承認時～再審査期間終了時）：総症例5,715例中、副作用が報告されたのは53例（0.93%）で、主な副作用は悪心13件（0.23%）、便秘10件（0.17%）、下痢7件（0.12%）、腹部膨満感7件（0.12%）等であった。

副作用が認められた場合には、投与を中止するなど適切な処置を行うこと。

過敏症 0.1%未満：発疹、蕁麻疹、痒痒感

●使用上の注意の改訂には十分ご留意ください。

胃炎・胃潰瘍治療剤

薬価基準収載

ガストローム® 顆粒

Gastrom®（エカベトナトリウム製剤）

指定医薬品

肝臓 頻度不明：肝機能障害、黄疸
消化器 0.1～5%未満：悪心、下痢、便秘、腹部膨満感
0.1%未満：嘔吐、腹痛

その他 0.1%未満：胸部圧迫感、全身倦怠感

2.高齢者への投与

本薬はほとんど吸収されず、非高齢者に比べて高齢者で特に注意する点はないと考えられるが、一般に高齢者では消化器機能が低下しているため、便秘等の発現には注意することが望ましい。

3.妊婦、産婦、授乳婦等への投与

1) 妊婦又は妊娠している可能性のある婦人には治療上の有益性が危険性を上まわると判断される場合にのみ投与すること。

〔妊娠中の投与に関する安全性は確立していない。〕

2) 授乳中の婦人に投与することとを避け、やむを得ず投与する場合には授乳を中止させること。

〔授乳中の投与に関する安全性は確立していない。〕

4.小児等への投与

小児等に対する安全性は確立していない（使用経験がない）。

〈資料請求先〉



田辺製薬株式会社

大阪市中央区道修町3丁目2番10号
http://www.tanabe.co.jp

2004年10月

新発売

骨粗鬆症治療剤
指定医薬品、要指示医薬品



エビスタ® 錠 60mg

塩酸ラロキシフェン錠

※注意—医師等の処方せん—指示により使用すること

EVISTA®

※「効能・効果」、「用法・用量」、「禁忌を含む使用上の注意」等詳細については、添付文書をご参照ください。



発売元（資料請求先）



中外製薬株式会社

〒104-8301 東京都中央区京橋2-1-9

Roche ロシュグループ

製造・輸入発売元（資料請求先）



日本イーライリリー株式会社

〒651-0086 神戸市中央区磯上通7丁目1番5号

2004年5月作成

腰痛症、頸肩腕症候群
変形性関節症、肩関節周囲炎
帯状疱疹後神経痛の
長引く痛み、神経因性疼痛に

ノイトロピン錠は NSAIDs とは異なる鎮痛機序、臨床特性を持ち、難治性疼痛治療薬の一つに位置づけられています。



指定医薬品

下行性疼痛抑制系賦活型
疼痛治療剤(非オピオイド、非シクロオキシゲナーゼ阻害)

ノイトロピン®錠

〈薬価基準収載〉

【効能・効果】

帯状疱疹後神経痛、変形性関節症、腰痛症
頸肩腕症候群、肩関節周囲炎

〈効能・効果に関連する使用上の注意〉

帯状疱疹後神経痛に用いる場合は、帯状疱疹発症後6ヵ月以上経過した患者を対象とすること。(帯状疱疹発症後6ヵ月未満の患者に対する効果は検証されていない。)

【用法・用量】

通常、成人1日4錠を朝夕2回に分けて経口投与する。
なお、年齢、症状により適宜増減する。

〈用法・用量に関連する使用上の注意〉

帯状疱疹後神経痛に対しては、4週間で効果の認められない場合は漫然と投薬を続けないよう注意すること。

禁忌(次の患者には投与しないこと): 本剤に対し過敏症の既往歴のある患者

※「使用上の注意」などについては添付文書をご参照ください。

健康を求め、未知に挑戦する

日本臓器製薬

1541-0045 大阪市中央区平野町2丁目1番2号 ☎06(6203)0441

資料請求先: 日本臓器製薬株式会社 学術部

薬価基準収載

(2004.10作成)

経皮複合消炎剤

モビラート®軟膏

効能、効果、用法・用量、禁忌を含む使用上の
注意等については添付文書をご参照ください。



製造販売 **maruho** マルホ株式会社
大阪市北区中津1-5-22 〒531-0071

〔資料請求先〕

プロスタグランジンE₁製剤

リプル[®] 注5 μ g・10 μ g

アルプロスタジル注射液

Liple[®] INJECTION

劇薬、指定医薬品、要指示医薬品^注 薬価基準収載

注) 注意—医師等の処方せん・指示により使用すること

※〈警告〉〈禁忌〉〈効能・効果〉〈用法・用量〉〈使用上の注意〉等の詳細については、製品添付文書をご参照ください。



5-HT₂ブロッカー

アンプラーグ[®] 錠50mg・100mg 細粒10%

塩酸サルボグレレート錠・細粒

ANPLAG[®] Tablets, Fine granules

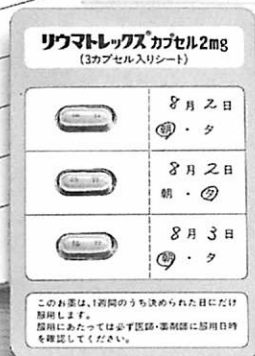
指定医薬品 薬価基準収載

※〈禁忌〉〈効能・効果〉〈用法・用量〉〈使用上の注意〉等の詳細については、製品添付文書をご参照ください。

製造発売元
三菱ウェルファーマ株式会社
大阪市中央区平野町2-6-9

〈資料請求先〉製品情報部 〒541-0047 大阪市中央区淡路町2-5-6

(A4 1/2) 2004年3月作成



抗リウマチ剤

劇薬 指定医薬品 要指示医薬品^注

リウマトレックス[®] カプセル 2mg

Rheumatrex[®] Capsules 2mg

メトトレキサートカプセル

薬価基準収載

注) 注意—医師等の処方せん・指示により使用すること。

注意 詳細については添付文書をご参照ください。禁忌を含む使用上の注意等の改訂に十分ご留意ください。

製造
Wyeth **ワイス株式会社**
〒104-0031 東京都中央区京橋一丁目10番3号

販売
武田薬品工業株式会社
〒540-8645 大阪市中央区道修町四丁目1番1号

2004年9月作成

